無縁人間

片桐洋右

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無縁人間

【Ｎコード】
Ｎ４８８５Ｋ

【作者名】
片桐洋右

【あらすじ】
迷路のような構造の大病院の中で起こる連続殺人事件。最後に明らかになる犯人の正体は・・・・？　驚愕の結論が待っている予定です。

第一章　ひとりめ　1

澤田総合病院の深夜のナースステーション。事務机を挟んで二人の看護師が椅子に座っている。二人とも若く、一人は二十歳前後、もう一人も二十代前半といったところである。

「ねえ山下先輩、あの特別室の辺り何だか気味が悪くないですか？」

准看護師である小倉美奈は、先輩看護師である山下沙織に唇を窄めた表情を見せた。

「ああ、何だか分かる。私も何度通っても嫌な感じなのよね」

山下はマグカップに入れた眠気ざましのブラックコーヒーに口を付けてから小倉に目を向けた。

澤田総合病院は二十四時間の完全看護体制を敷いている。従って整形外科病棟に勤務する看護師は、ほぼ週に二回の夜勤がローテーションとなっている。

院内は十時で完全消灯され、暗い館内でナースステーションだけが一晩中、煌々と明かりを放っている。蛍光灯の白い光が白い看護服を照らし出す。

「私、特に霊感があるとか、そういうタイプじゃないんですけど、初めて特別室の辺りを夜勤で見回ったとき、何かにじっと見られてるような視線を感じちゃって――」

小倉は両手を体に回しながらぶるっと震えてみせた。

「でも小倉さん、あなた今夜、巡回でしょ。その話題、自分を追いつめていない？」

山下は形の良い唇に笑みを浮かべたまま、視線で咎めた。

「そうなんですよぅ～、だからもう怖くって～」

得意の鼻にかかったような口調で応えて、小倉は肩をすくめた。

再びナースステーションに静寂が訪れた。時計の秒針の音が響く。

ふと山下は顔を上げて、暗い廊下のほうに目を遣った。誰もいない――。

小倉も釣られるように見たが、誰もいないのを認めて、山下に視線を向けた。
「どうしたんですか？　先輩」
視線を戻した山下を、小倉は不安げな表情で見詰めている。
突然、ブザーが鳴った。山下も小倉も肩をびくんと震わせたが、巡回時間を告げるブザーだと分かって、お互い気が抜けたような笑顔になった。
「もう――」思わず山下が声を漏らす。
「先輩、巡回代わっていただけませんか？」小倉が泣き笑いの顔で懇願した。
「だーめ。これも修行よ、行ってらしゃい」山下は笑顔のままぴしゃりと言い放った。
小倉は両手を目の下に当てて、子供が泣くときのような仕草を見せたが、やがて「ではでは、巡回に行ってまいりま～す」と立ち上がった。
山下は、懐中電灯を手にナースステーションを出る小倉の後ろ姿に「いってらっしゃい」と明るく声を掛けた。

＊

澤田総合病院は創立からわずか二十年の内に今日の規模と業容へと成長した。急激な診療科目の拡大と患者数の増加に伴い、施設は無理な増築を重ねた。結果、院内は迷路のように曲がりくねり、暗がりの中では小倉ですら迷ってしまうことがあるほど、複雑な構造を成していた。
迷路のような構造は、医療機関にとってけっして好ましいことでなく、従って有人の看護体制の他に、各所には防犯カメラが設置され、入院患者の徘徊や不審者の侵入といった事態に備え、構造的な問題を補っていた。
小倉は大部屋と呼ばれる、一室に複数の入院患者が入っている部屋の中を順番に見回って行く。扉を開けて、中をライトで照らす。いびきをかいて眠る者、何度も寝がえりを繰り返す者、寝言を言

う者など寝相は様々であるが、別段変ったところはなく、いつもの夜の病室の風景であった。

小倉は一通り大部屋の巡回を終えて、長い曲がりくねった廊下を歩いていた。廊下を行き当たった所が、先ほどナースステーションの中で話題に上っていた特別室のある棟だ。

廊下のむかって右側には窓が並び、雲間から覗いた月明かりが薄く差し込んでいる。左側に十並ぶ個室は満室であった。小倉は一部屋ずつ、扉を静かに開いて中の様子を覗う。どの部屋も窓際にベットが置かれ、小さなソファとテーブルが一つずつ設置されている。

個室の並びのさらに奥、角を一つ曲がったどん詰まりのところにポツンと一室だけ、トイレと風呂を備えた特別室があった。小倉は個室の巡回を全て終えると、特別室に向かう廊下の角のところで立ち止まった。月明かりも届かない暗い廊下の端、周りから死角になった場所、闇の色はいっそう深い。

小倉は結局、特別室にまで足を運ばずに歩みを戻した。今、特別室に入院患者はおらず、ただでさえ気味の悪いところに近づきたくない、と思ったのだろう。

早足でナースステーションに戻る途中、小倉は何かに魅かれるように足を止めて振り返った。月明かりの照らす廊下のいちばん奥のところ、特別室へ向かう角のところだけが、深い闇を作っている。

小倉は廊下の真ん中で、闇へと視線を引き絞った。そして、凍りついたように動かなくなった。

第一章　ひとりめ　2

翌朝、横浜市青葉署の刑事である前川功は、コンビを組んでいる板井幸男とともに、現場に向かっていた。

「おお、そこだ。そこの交差点を曲がれ」

いかつい肩からのびる太い右腕を前方に伸ばして、板井が方向を指し示した。短く刈りこんだ頭髪と、柔道でカリフラワーのように潰れた耳を持つこの中年男は、見かけからは考えられないほど甲高い声を出す。

「わかりました」前川はハンドルを右に切って公園とドラッグストアに挟まれた細い道路に入った。

車は、両脇に桜の樹が続き、花びらがはらはらと散る中を進む。調剤薬局や飲食店が軒を連ねる様は、さながら門前町の様相である。

やがて進行方向右手に、丘の上にそびえる、病床数五百を備えた澤田総合病院の白い建物が姿を現した。

門の中に車を乗り入れ、ゆっくりと桜が舞い落ちる緩やかな坂を上る。既に玄関には数台のパトカーが停車していたが、前川らは玄関前を通り過ぎ、車を駐車場に入れてから早足で職員入り口に向かった。

職員口から院内に入ったところは、総合受付であった。朝六時を過ぎたばかりで、正面玄関は開いていない。院内は暗く、人影はない。

前川は、板井に続いて受付の前を通り過ぎ、正面の階段を上った。階段を上り切ったところに二階の見取り図が掲示されていた。

見取り図は、迷路のように入り組んだ病院の構造を示しており、ひと目で目的地までの道のりを憶えることが難しいほどだ。「こりゃあ、迷路だな」印象そのままを口にして、すっかり道順の理解を諦めてしまった板井を尻目に、前川は歩き始めた。

最初の角に、制服姿の警官が立っている。前川の姿を認めると無

言で現場の方向を指し示す。板井も後について来る。
前川らは、制服警官が立つ角を何回か曲がって、ようやく現場の整形外科病棟にたどり着いた。
パジャマ姿の入院患者達が、遠巻きに幾重もの輪を作って集まり、何やらひそひそと小声で話している。背の高い前川には、患者越しに現場の辺りだけが煌々と明かりに照らされているのが見えた。周りに立ち入り禁止の黄色いテープが張り巡らされ、テープの内側に警官が立ち塞がっている。
前川らは患者達の輪の間を分け入り、現場であるナースステーションの前にたどり着いた。立ち塞がる警官に手帳を見せ中に入る。
ナースステーションの入り口は青いビニールで覆われ、外からは中が覗えないように目隠しされている。前川はビニールの端を上にあげて板井を先に通し、後から中に入った。扉は開け放たれ、鑑識課員が指紋採取の作業を行っている。
刑事課の係長である須崎順三が、前川らの姿を認め近づいて来た。
「おう、お疲れ。久々にひでぇぞ、こりゃぁ――」
顔を歪めながら前川の背に手をあてて、部屋の中に促した。
部屋に入った途端、むせ返るような生臭い匂いが前川の鼻孔を襲い、次いでこの世のものとは思えぬ光景が視覚を襲った。
ナースステーションの中はまさに地獄絵図であった。驚くほどの量で部屋の真中に溜まった血の池は、脂分がぬらぬらとライトを浴びて所々光り、一方で凝固が始まって赤黒く変色していた。
血の池の中に横たわる死体が、看護師であることは衣服から明らかであった。ただ、白い制服は血で赤く染まり、頭部が――無かった――。切断面はざくろのように赤黒く熟し、中心部に白い骨が露出している。
「こりゃ、又ずいぶん派手にやってくれたな――」
板井はベテラン刑事らしく凄惨な光景にも顔色ひとつ変えず呟いた。
「ひでぇだろ。詳しいところはまだこれからだが、他に外傷が見当

たらねぇ。となると、ホトケは、生きたまんまバッサリやられたことになる――」
前川は死体に向かって合掌した後、問うた。
「頭部は、見つかったのですか」
前川はむせ返る悪臭に耐えながらも、平然とした表情を辛うじて保つことができた。こんな場面で目を背けてしまっては、後で馬鹿にされること間違いない。
「ああ、中庭の植え込みの中からな。多分、あそこの窓から投げ込んだんだろう」
須崎は応えながら、前方の開け放たれた窓に顎を振った。
前川は血の池を慎重に避けながら窓に近づき、外を見下ろした。桜の樹に囲まれ、自転車置き場に面した中庭には立ち入り禁止の黄色いテープが結界のように張り巡らされている。散った花びらの桜色の絨毯が敷き詰められた所々で、鑑識課員がうずくまり、警察犬が臭いを嗅ぎながら歩き回っている。
「前川、課長が呼んでる」背後で声がした。振り返ると真近に板井の四角い顔があった。
「課長が――？」
「第一発見者が若いねーちゃんだそうだ。俺らみたいな厳ついゴリラより、二十代で優男のお前の方がイロイロと話しやすいだろうってな」

第一章　ひとりめ　3

若い巡査に案内された場所は一階の事務局であった。まだ早朝ということもあり、事務員たちは出勤していない。全員が着席すれば五十名以上になるであろう、病院の事務局としてはやはり大きい。

前川は巡査に案内されるまま事務局の中を通って、一番奥のパーテーションで仕切られた会議用スペースの扉をノックした。

中から返事があるのを待って、巡査が扉を押し開いた。男の声であった。

会議室の中は、折り畳み式の長テーブルが正方形に配置され、周りをスチール製の椅子が囲んでいる。ブラインド式のカーテンは全て広げられ、窓一面に広がる桜の花の間から朝日が溢れている。

入り口の一番近く、四角に配置された長テーブルの角を挟んで、中年の肥った男と、前川に背中を向ける形で若い看護師が座っている。

中年の男が立ち上がり、前川に名刺を差し出した。でっぷりと肥った体に地味なねずみ色のスーツを合わせ、脂分の多い頭髪に小さな丸眼鏡を掛けている。《事務局長　近藤義一》とある。

「朝早くから、ご苦労様です。この度は本当に大変なことになってしまいまして――」

近藤は額にハンカチを当てながら眉を八の字に下げ、困惑したような表情を見せた。

「青葉署の前川です。第一発見者の方はこちらですか？」

前川は内ポケットから名刺を差し出しながら、看護師の背中に目を向けた。

頷く近藤と立ち位置を入れ替わるように、前川は看護師の斜め前に回りこんだ。

まだ若い女の看護師であった。泣き腫らした焦点の合わない目は真っ赤に充血し、放心したように表情が消えている。親しい者の死

に接した者は皆、同じような反応をする。
前川は女の顔を見ながら、スチール椅子に座った。
「失礼ですが、お名前をお聞かせいただけますか？」
反応しない女の代わりに、口を開こうとする近藤を手で制した。今のような状態の場合、まず本人の口を開かせることが重要である。
女は応えない。虚空をぼんやりと見詰めたまま視線が動かない。無理もない、殺人現場を見慣れているはずの自分ですら目を背けたくなるような凄惨な場面を目撃したのだ。ましてや、自身の同僚が被害者であるなぞ――。
前川は同情の気持ちが心の中を支配しつつある状況を振り払って、一回り大きな声を上げた。
「すいません、青葉署の者です。あなたのお名前をお聞かせいただきたいのですが」
女の視線が虚空からゆっくりと動き、前川の顔のところで止まった。
「聞こえますか？　お名前は何とおっしゃいますか？」
「お、小倉――、美奈――です」
力の無い、空気が漏れているような発音だったが、何とか聞き取ることができた。前川は斜め後ろに立つ近藤に顔を上げた。近藤は「間違いない」とばかりに頷く。
「小倉さん、ありがとうございます。辛いことをお聞きしますが、被害者が誰だかお分かりになりますね？」
「ゃ―した――せんぱぃ――です」
「すいません、もう一度」前川は耳を寄せた。
「や、山下――、沙織さん――です！！」感情が爆発したように大きく叫ぶと、両手で顔を覆い、声を上げて泣き崩れた。これ以上、聞くことは無理だろう。
「ありがとうございます」前川は立ち上がり小倉の肩にそっと手を載せると、近藤を窓のほうに促して向かい合った。散った桜の花びらが窓ガラスに張り付いている。

「山下沙織さんというのは？」
「整形外科病棟の看護師です。小倉の先輩に当たりまして、昨夜は一緒に夜勤をしておりました」
誰かが入って来た気配に目を向けた。開け放たれた入り口のところに黒っぽいスーツ姿の痩せた長身の男が立っていた。青葉署の主任刑事の黒田康司である。
黒田は入り口のところに座る小倉に顔を近づけた後、ゆっくりと前川に近づいて来た。
削ぎ落されたようにこけた頬、窪んだ眼窩、どす黒い顔色――、常に黒っぽい服装を好む上に、言いようのない負のイメージを全身に纏ったような黒田の印象に、前川はいつも“死神”を連想していた。
「前川、遅くなったな」黒田は唾液に光る細長い歯を見せてにやりと笑った。青葉署に異動してから三カ月の前川は、黒田の笑顔をこのとき初めて見た。全身から強い煙草の臭いが漂う。
百九十センチ近い長身の黒田は、近藤を見下ろすように黙って顔を向けた。「誰だおまえは？」と顔に書いてある。
「黒田さん、こちら事務局長の近藤さんです。今、発見者と被害者の関係をお聞きしていたところでして」
前川も百八十センチ近い長身であるが、黒田を見上げるように近藤を紹介した。
「ここはあちこちに防犯カメラが設置されているだろう。録画テープを見せてくれ」
前川の言葉に反応することなく、黒田は近藤に問うた。
「は？　ああ、はい、警備室にございます。こちらへどうぞ」
黒田の独特の雰囲気に初対面の人間は大抵圧倒され、萎縮してしまう。近藤も例外ではなかった。
「黒田さん、お分かりだと思いますがその辺の動きは一応、課長の許可を――」
黒田は前川をじろりと見下ろした。「若造が偉そうに意見するな」

と眼が語っている。
前川は、小倉が落ち着くまで休ませておくように若い巡査に指示をして、近藤と黒田の後に続いて会議室を出た。

第一章　ひとりめ　4

警備員室は職員入り口のところにあった。二十四時間有人で院内への人の出入りをチェックするとともに、奥の小部屋では各階の様子が防犯カメラで捉えられ、専任の警備員が交代制で監視を行っている。

防犯カメラで捉えられた映像は原則一週間保存され、後は自動的に消去される仕組みになっていた。

警備室の中には既に上野毛刑事課長や須崎係長を始めとした刑事課の面々が揃っていた。どうやら黒田は然るべき段取りを踏んでいたようだ。前川は黒田にいらぬ意見をしたことを恥じた。

警備員を真ん中に座らせ、上野毛刑事課長と須崎係長が両脇を挟み、その後ろに板井、黒田、前川、事務局長の近藤が立った。

「午前二時から三時、整形外科病棟のナースセンター近辺の映像を見せてくれ」

黒田が煙草に火を付けながら警備員に指示した。指定した時間は犯行が行われたと推定される時刻だ。

画像は目撃者の小倉がナースセンターを出るところから始まった。ナースセンターの入り口の灯りを右手に、暗い廊下を見下ろす映像である。部屋の中の様子は分からない。右下に表示された数字が午前二時過ぎであることを示している。画像は非常に鮮明であり、薄明かりの中でも、歩いて画面下に消えた小倉の表情がはっきりとわかった。

「部屋の中の映像はないのですか」前川が問うた。

「ありません。廊下部分の映像のみです」警備員が応えると、近藤が付け足す。

「カメラの目的はあくまでも患者の徘徊の発見と防犯上の理由ですので――」

画像は向かって右側にナースセンターから洩れる灯りと、左側の

暗い廊下の対比を写したまま静止したように動きがなくなった。前川は僅かな変化も逃すまいと注視していたが、十分も同じ映像が続くと、さすがに集中力が落ちてきた。

「早送りしてください」五十を過ぎたばかりで、早くも老眼になった眼をしょぼつかせながら上野毛が指示した。

画面を横切る細い線が、一定の間隔で上から下に流れ落ちる。カメラは暗い廊下の光景を映し出している。変化は見られない。

「止めろ」黒田が指示する。前川は画像を注視したが、変化が表れている様子はない。黒田は妙な勘の良さがある、今も何かを感じたのか。

やがて、画像の下方から黒い影が現れた。右下の時刻は午前二時二十一分を示している。

上野毛は椅子を倒して立ち上がり、顔を画面に寄せた。須崎が警備員を弾き飛ばして画面の正面に腰掛け、上野毛の顔の横に顔を並べる。

背後からカメラに捉えられた影は、ゆっくりと画面の下方から上方に移動していく。歩き方がやや変則だ。左足を引きずるような歩き方をしている。

「でかいな――」上野毛が呟く。

「――男ですね」板井が応える。影は上背があるというより横幅に大きい。肥満体とも言えるほどだ。

上下を黒っぽい衣服に包み、頭髪は――確認することができない。すっぽりとフードを被っている。右手に何か細長い棒のようなものを持っている。

黒い影はナースセンターの前まで移動すると、正面で立ち止まって横を向いた。フードが顔の半分を覆い横顔も確認できない。唯一口元だけを僅かに見ることができた。中の様子を覗っている。付き出た腹が大きく波打っている様子が鮮明に映っている。

影が右手に持った棒の一端を左手で握り、そのまま両手を左右に開くような動きを見せると、棒は二つに分かれた。左手には黒い棒

が、右手には白く光る金属質の棒が握られている。
「鞘を抜いた、日本刀だ――」前川は咄嗟に呟いた。
影はナースセンターの前で微動だにしない。棒を持った両手をだらりと下げて立っている。中にいる山下に、顔を見られることを全く恐れていないように見える。
やがて影は黒い手袋をはめた手でドアノブを握った。ゆっくりとナースセンターの扉を開き、中に姿を消すと扉は閉じられた。
カメラは再び元の光景に戻った。右側のナースセンターから洩れる光が暗い廊下を照らしている。ただ、最初と異なるところは右の光の中で殺人が行われているという点だ。
前川の脳裏に凄惨な現場の光景が浮かび上がった。部屋の真中に溜まった血の海、首のない死体、そして――ざくろのように熟した切り口――。
あの光景を生みだした惨劇が、今まさに画面の中で行われている――前川は胸を押しつけられるような息苦しさを感じた。
扉がゆっくりと開いた。画面右側のナースセンターの中から黒い影が再び姿を現す。午前二時四十三分、犯行はわずか二十分ほどで実行されたことになる。
部屋を出たところで後ろ手にドアを閉める。相変わらずフードを目深に被っているため顔は見えない。しかしながら、右足を引きずる独特の歩き方で画面の下方に消える一瞬、カメラはフードの下から覗く口元だけを正面から捉えた。
何かを喋っている。ゆっくりとした動きとは正反対に、口元だけはせわしなく動いている。肌は驚くほど白く、唇は血を塗ったように紅い。
黒い影は呪祖でも唱えるように口元だけを動かし続けたまま、ゆっくりと画面下に消えた。犯行場所から一刻も早く逃れようという焦りは覗えない。むしろ事を為して満足げに引き上げているようにすら見える。前川は全身が粟立つような悪寒を感じた。
「なんだ、こいつは――？」

板井が唸り声を上げながら呟いた。上野毛が椅子に凭れ、煙草に火を点ける。

須崎は変わらず、画面上に目を止めていたが二度と黒い影が画面に現れることはなかった。ボタンを押して画面を停止させる。

前川は、板井の言葉に応えようと考えを巡らせた。しかし結局のところ、表現しようのない殺人鬼の姿に継ぐ言葉が見つからなかった。

警備室の中に暗く、重い沈黙がのしかかっていた。

第一章　ひとりめ　5

澤田芳江は、夫の総一郎の病院で起きた殺人事件を報じるテレビニュースを見た後、家の掃除を始めた。殺人事件であるから、大変な事件であることには間違いがないのだが、芳江には、何か遠いところで起こっているような感覚があった。

総一郎は病院での出来事を家庭で一切口にすることがなく、芳江の実家の父も医者であったが、父も家庭においては総一郎と全く同じであった。

世の男というものはそういうものなのだろう、と思っていたし、働きに出たことのない芳江は、仕事のことには一切関わるつもりがなかった。

澤田家は総合病院を経営する家庭に相応しい広大な屋敷を病院の裏手に構えており、部屋数も二十を超えていた。

夫はお手伝いでも雇えと言ってくれるのだが、毎日使う部屋以外は頻繁に掃除の必要はないし、例え掃除のためでも自分達が普段生活する場所を赤の他人に見せる人の気が知れない、と芳江は考えていた。

一階のリビングや台所の掃除を終え、二階の夫婦の寝室を最後に終了する、というのがいつもの流れであった。だがこの日は、息子の孝の部屋の前を通りかかったとき“何故か”ふと足が止まった。

医学部の三年生になる独り息子の孝は、小学生の頃から取り組んでいる剣道の影響か、礼儀正しく、声を荒げたりすることもない穏やかな性格の男性に育った。

芳江は思春期を迎える中学の頃から、孝の部屋を無断で掃除することは控えるようにしていた。精通を迎えた男なら自慰も行うであろうし、当然親に見られたくはない雑誌なども隠してあるだろう――と、いうのは息子や夫への建前で、その実、芳江は息子にばれることのないよう、慎重に机の中を開いて日記を読み、ごみ箱の中を

あさって自慰の有無を確認し、ベット下に隠された猥褻な雑誌などを確認することが週に何回かの習慣になっていた。
病院が夫の持ち場であるならば、家庭は私のモノ、隅から隅まで把握しておかなければならない、例外なく――息子の部屋の中は勿論、息子が何を考え、どんな女性と付き合い、どんな話をしているのか、把握しておくのは当然のこと――。
さすがに大学に入学するようになってからは、ベット下の雑誌類はいつの間にか処分されていたが、芳江の習慣は変わることがなかった。
孝の部屋の前で足が止まったのも、決して“何故か”ではなく、“いつもの”習慣の一つであった。
芳江はそっと孝の部屋のドアを開いた。窓のカーテンを開く。南側に面した孝の部屋は日当たりがよく気持ちが良い。
最初に窓際に置かれた机に向かい、引き出しを開ける。日記をペラペラとめくり内容を確認する。特に目新しいことは書かれていない。配置の変わらないように慎重に元に戻して引き出しを閉めた。
次に芳江は本棚に向かい、一通り並んだ本に左側から右側に順番に目を向けた。医学部の学生らしく、医学書が大半を占めているが、高校生の頃から収集している漫画の単行本や、剣道の技術本も何冊が混ざっている。
芳江は本の並びを見れば、最近孝がどの本を手にしたかが分かるほどであった。孝がまだ高校二年生の頃、並びの変わったあたりに女子高生からのラブレターが挟まっていたことがあった。
メールが当たり前の今日、敢えてラブレターを寄こす女子高生の生真面目さに、芳江は好感を持ったものであったが、今頃、あの女子高生と孝はどうなっているのだろう。日記を見る限りでは何の表記もなかったから、そのまま何事もなかったのだろうか――。
などと考えながら本棚を眺めていて、あるところで目が留まった。他の本に比べて、その二冊分だけが棚から前にせり出している。二冊とも分厚い辞書で初めてみるモノでもなかったが、あきらかに本

の収まり方が異なっていた。
（奥に何かある――）
芳江は、慎重に二冊の本を引き出して床に置き、辞書二冊分の厚みだけ空いた空間に目を遣った。
奥には、一冊の本が棚に背表紙をつける形で収まっていた。芳江は手にとって表紙を見た。真っ黒の丁装に白抜き文字で「猟奇殺人事件研究」とある。
芳江は本の中身を開いた瞬間、驚いて本を床に落としてしまった。いきなり目に飛び込んできたのは無残に頭部を割られ、脳漿が飛び散った死体の拡大写真であった。
芳江は湧きあがる悲鳴を、口に手を当てて必死に抑えた。がくがくと足が震え、膝が笑い、へなへなとその場に座り込んでしまった。
（孝が何故、こんな恐ろしい本を読んでいるの？　医学の勉強の本かしら？　そう、きっとそうだわ、解剖か何かの参考にあんな本を読んでいるんだ――）
芳江は気力を振り絞り立ち上がると、恐る恐る本を手に取った。もう中を見る気は起きない。部屋から逃げ出したくなる気持ちを必死で抑えながら、慎重に本棚を元通りに戻し、部屋を出た。
芳江はふらつく足元に耐えながら一階の居間に戻って、ソファに横になった。頭痛がひどい。
居間で付けっ放しになっていたテレビは、司会者が変わっても、澤田総合病院の殺人事件の犯人像に対しての特集を行っている。如何に残酷な殺人事件であるにせよ、よほど今日は他にニュースがないのだろう。
心理学者とテロップの表示されている痩せた男がもっともらしくコメントしている。
「この稀に見る猟奇的殺人事件は――」
芳江は目を剥いた。図らずも先ほど孝の部屋で見た言葉と同じ言葉が今、テレビの中から発せられた。
この家庭は私のモノ――私の知らないことなどこの家庭の中にあ

ってはならない、ましてや――

第一章　ひとりめ　6

前川は、青葉署に設置された澤田総合病院殺人事件捜査本部の会議に参加していた。神奈川県下有数の総合病院での殺人事件であり、マスコミの扱いも大きい。県警本部からは百名近い捜査員が投入され、捜査本部の置かれた青葉署の会議室は、目をぎらつかせた捜査員達の熱気でむせ返っていた。

雛壇と呼ばれる捜査会議場の前方には、本部長である県警刑事部長を中心に副本部長の青葉署長、県警捜査一課長が両脇を囲み、県警の機動捜査隊長、一課指導官など本部の幹部連が顔を揃えている。一方の青葉署側には副署長、刑事官、刑事一課長の上野毛が腰を下ろし、皆一様に口を真一文字に結んでいる

席の前方に県警の刑事達が当たり前のように着席し、所轄である前川ら青葉署の捜査員達はは自ずと後方の席に着席していた。

警視庁と所轄の対立は今や一般人でも知る有名な話であるが、神奈川県内においても県警本部と、地元の捜査員の間に同様の図式が存在する。

「それでは始めます。起立・お互いに礼――」

刑事部長、署長の訓示の後、眉が薄く、剃刀で切ったような細い眼の中野有次指導官が主導して会議は進行された。

「まずは解剖所見に関してこちらから報告する。死因は、頚部割創による離断、簡単に言えば斬首だ。左右の頸動脈、静脈がきれいに切れており、切断の凶器は鋭利な刃物によるとされている」

中野は親指を立てて喉元を切る仕草をした。

「被害者に犯人と激しく争った形跡はない、又、切創や打撲痕などの小さな傷も一切ない。性的暴行の痕跡もなし。断面の力のかかり具合も考慮すると、犯人は被害者の背後に忍び寄り、切りつけたと考えられる。死亡推定時刻は午前二時二十分から四十分の間」

「ここまでで質問あるか」中野が問うた。

すぐに前方に陣取る県警の刑事の中から手が挙った。中野はボールペンの先で指さして、質問を許した。
「マルガイ（被害者）に、抵抗した痕も傷も無いとのことですが、ホシはマルガイの首を一発で刎ねたと考えてよろしいのでしょうか」
立ちあがった男は板井をもうひと回りがっちりさせたような広い背中の男である。
「どういう意味だ？」中野が、怪訝そうな顔で訊き返している。
「人間を斬首するというのは非常に難しい、と聞いております。もし所見の通りホシが斬首したというのであれば、かなりの怪力の持ち主か、あるいは刃物の使用に非常に長けたものかと――」
「おお、あいつなかなか鋭いといころを質問するな」前川の左隣に坐る須崎が小声で呟いた。
「どういう意味なんですか？」前川は須崎に顔を寄せる。
「江戸時代にゃあ切腹する侍の首を切り落とす介錯人ってえのがいたんだが、そんな首切り専門の侍にしたって、一発で首が切り落とせないことがあったそうだよ」
「へえ、そうなんですか」前川は須崎が時代小説の愛読者であったことを思い出した。
「それくらい首切りってえのは難しいんだ」須崎はまるで自分が経験したかのような口ぶりで囁いた。
雛壇の中野は書類を凝視した後、顔を上げた。
「解剖所見からは何度も切りつけたという記載はない。従って一度で斬首されたということだ。ホシが怪力の持ち主か刃物の使用に長けた者かは今後の捜査によるところなのは言うまでもないが、君の意見は非常に重要な示唆を含んでいると思う」
中野は、質問した刑事から視線を外して着席を促すと、隣に坐る捜査一課長に顔を近づけた。暫く言葉を交わした後、顔を戻し「おい、黒田いるか？」と前川達が坐る席の後方に向けて声を上げた。
前川の後ろから「はい」とかすれた声で黒田が応えた。前川が振り返ると黒田はパイプ椅子を鳴らしながらゆっくりと立ち上がると

ころであった。前方の刑事たちも一斉に振り返った。百九十センチ近い長身に黒い服を着た死神のような姿に、会議室は静まり返った。
「青葉署の黒田くんだ。彼はかつては剣道の全国大会の出場経験もある剣の達人だ。そうだな、黒田――」
「そうなんですか？　黒田さんが――」前川が板井に目を？いた。
「いや、俺も知らなかった」板井も小さな目を丸くしている。
黒田は反応しない。無表情のまま視線を前方に向けている。
「その剣法の達人の君に聞きたい。真剣と竹刀の差はあるだろうが、どうだろう？　今の質問にあったように首を一刀両断するというのは難しいものなのか？」
「私は人間の首を切ったことはありませんので、はっきりとは申し上げることはできませんが――」
普通の者が口にすれば冗談として笑いの一つでも起こりそうな言葉である。しかしながら常に黒いオーラを纏っているような黒田が発すると、「首は切ったことはないけれど、別のところならある」と言外に匂わせているように聞こえる。会議室の参加者は身じろぎもせず黒田を見詰めている。
「日本刀で畳を切ったことはあります」
そうか、それなら自分も見たことがある、と前川は思った。確か野球選手が精神修養のため、日本刀で畳を真っ二つに切っていた映像をテレビで放映していた。
前川は、黒田が日本刀の抜き身を手に身構える姿を想像して、身震いした。
「しかしながらよほど精神を集中させ、剣の角度と速度を極めて打ち込みませんと、一刀のもとに切ることはできません。失敗すれば、刀が、柔らかい畳にはじき返されて大怪我をします」
「つまり、君はどう思うんだ。ホシがマルガイの首を一発で切り落としたことに関して」
中野が問うた。眉根に縦皺を寄せている。気が短いのだろう、と前川は感じた。

「――素人ではない、と考えます」
「なるほど、わかった」と中野は応えた。隣で頷く捜査一課長に再び顔を向けている。
「黒田さんと中野指導官は顔見知りなんですか？」
「さあ、上野毛課長に後で聞いてみるか」
前川の問いに板井は首を傾げた。

第一章　ひとりめ　7

「その他に質問はあるか？」視線を戻して再び中野は問うたが、特に挙手はない。

「なければ次に行く。鑑識」

鑑識課長が立ち上がる。同時に、雛壇の後ろに広げられた液晶スクリーンが輝き始めた。

「現場で採取した毛髪や指紋は、現在解析中です。しかしながら設置された防犯カメラにホシと思われる人物が撮影されておりましたのでそちらをご報告いたします」

鑑識課長の発言に会場がどよめいた。やがてスクリーンには数時間前、前川達が見た、“あの”薄暗いナースセンターの廊下の映像が現れた。

スクリーンの下方から、片足を引きずる独特の歩き方の黒い影が現れる。刑事たちのささやく声があちこちで聞こえる。

影がナースセンターのところで横を向いたシーンで映像が止まった。

「この映像が、ホシの犯行直前の様子を写したものであることは間違いないと思われます。向かって右側、明かりのついている方向、ホシが顔を向けている方向ですね、こちらがマルガイが勤務しているナースセンターです」

鑑識課長が、雛壇の後ろでパソコンを操作している若い鑑識課員に合図を送った。画像が拡大され、影の全身像がより大きく映し出された。

「この画像からホシの体格を推測することができます。身長は百六十センチ前後、体重は百キロ近いと思われます」

再び会場がどよめいた。前川の横で須崎が「肥満体だな」と呟く。

再開された映像は、影が刃物を鞘から抜いたところで再び止まった。会場のどこかで「日本刀だ」という声が聞こえる。

「今、どなたかも仰いましたが、このホシの動き、邪念なく見るならば日本刀を鞘から抜いた動作であると、皆さん感じると思います」
会場内に同意の空気が流れた。雛壇に居並ぶ幹部連も頷いている。
その後も随所随所で映像を止めて、鑑識課長は解説や所感を加えていき、犯行を終えたホシが映像下方に消える直前に若い課員に合図を送った。
「この画面で初めてホシの顔の一部を見ることができます。お気づきと思いますがホシの動作そのものはどちらかと言えば緩慢と言えるほどですが、僅かに写る口元は、正反対に非常にせわしなく動いています」
「ホシは何を言っているんだ」捜査一課長が問うた。
「わかりません。現在解析中ですが、まるで早口言葉のように口を動かしています。呪文でも唱えているのか――」
呪文という言葉に会場内が凍りつくのを前川は感じた。それはホシの映像を見た捜査員全員が感じた印象であったからだろう。
「この映像に関して何か質問は？」
中野は静まり返った会場を見回しながら問うた。やはり挙手はない。
「ご苦労様でした。では次に進む」鑑識課長が着席した。
「捜査員一人一人の報告を聞いている時間はない。したがって各班長が意見を取りまとめて報告して欲しい、まずは被害者身辺調査班」
「はい」と応えて前方に坐る刑事が立ち上がった。天然パーマが伸びたような中途半端なヘアースタイルの小太りの男である。
大里と中野から呼ばれた刑事の報告によれば、被害者は山川沙織、二十五歳、澤田総合病院での勤務は五年となる中堅どころの看護師とのことであった。
出身は新潟県、病院に隣接する独身者寮に入居しており、両親は健在、高校生の弟が一人いる。
交友関係は生活の不規則な看護師の宿命であろう、決して広くはなく、交際している異性はない、ただ、被害者は病院内でも有名な

美人であり、交際を迫る男性は後を絶たなかった、とのことであった。
前川は雛壇の黒板に張られた山川沙織の写真を見た。なるほど、大里の言うとおり文句のつけようのない美人だ。二十五歳とのことだが、もっと若く見える。
尖った顎の小ぶりな顔に黒目がちの大きな瞳、顔の横に二本指を突き立てた今時のピースサインをして微笑んでいる。
その後も次々と班長が立ち上がって担当範囲の報告がなされていったが、直接容疑者に繋がるような有力な報告は上がってこなかった。
捜査会議は終了に近づき、最後の締めくくりに中野指導官が再度声を上げた。
「現時点では、未だホシの犯行目的、動機も明らかになっていないが、各班初期捜査段階でのスベリは決して許されない。明日から再び本部捜査員全員が一丸となって事件の解決に臨んでもらいたい。又、この事件はマスコミの取材も日々、厳しくなっている。そちらの対応にもじゅうぶんに注意してもらいたい」
中野は隣に座る刑事部長と捜査一課長に目配せをした後、
「本日の捜査会議は以上、起立・お互いに礼」と捜査会議を終了させた。

第一章　ひとりめ　8

澤田芳江は一階の居間のソファに腰かけて独りでテレビを見ていた。画面からは人気の芸人達の賑やかな笑い声が溢れているが、画面を見詰める芳子の目は虚ろで、表情には何の色も浮かんではいない。

ふと壁の時計を見た。午後十時を過ぎている。芳子はゆっくりと立ち上がると、のろのろとキッチンに歩いた。そろそろ主人が帰ってくる時間だ。

独り息子の孝は、大学入学後は飲み会だ、旅行だと何かと理由をつけて帰宅は夫以上に遅い。今日も帰りは遅くなると先ほど連絡があったばかりだ。

「まったくもう、孝ったら遊んでばかりで。少しお父さんにも厳しく言ってもらわないと――」

芳子は独りごちりながら、鍋に火を点けた。

総一郎は、このところ連日の接待で夕食は外で済ませてくることが多い。しかしながら飲んだ後の味噌汁だけは芳子の作ったものを帰宅後、一杯飲むのが習慣になっていた。

玄関のチャイムが軽やかな音を立てた。芳子は玄関に向かい扉を開く。

見事な銀髪を後ろに流した総一郎の顔が現われた。芳子を柔らかい眼差しで見詰める笑顔はいつもと変わらない、だが、ひどく疲れているように見える。額の皺がいつになく深い陰影を総一郎の顔に落としている。

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま――」

差し出された鞄を受け取りながら芳子は総一郎の顔を見詰めた。靴を脱いで上がる総一郎の後ろに従いながら居間に戻ると、声を掛けた。

「あなた、お身体の具合が悪いんじゃないの。顔色が良くないわ」
「ちょっと、飲み過ぎたようだな。ここのところ色々あるからね」
ネクタイを緩めながら総一郎はソファに腰を下ろした。
「味噌汁、お食べになる？」
「ああ、食べる」
総一郎の応えを待って芳子はキッチンに向かった。鍋のふたを開けると湯気が立ち上り味噌汁の匂いがキッチンに立ちこめる。
「あなた、さっき孝から電話があってね。あの子、今日もまた遅くなるって言うのよ。もう孝もいい大人なんだから、というのは分かるんだけどまだ学生じゃない――」
芳子はいったん、言葉を区切った。味噌汁をお盆に載せて、居間に向かう。テーブルに味噌汁を置きながら総一郎に目を向けた
「今度、あなたからも言ってくれないかしら――」
総一郎は何か考え事をしているようだ。視線を合わせず「誰に言うんだい？」と呟くように応えた。
「孝にですよ、他に誰がいるんですか」
芳子の応えに、総一郎は、何も言わず笑顔を見せた。「お願いしますね」と念を押してキッチンに戻る。
芳子はキッチンで洗い物をしながら、考えていた。昨日、孝の部屋で見つけた“あの”気味の悪い本のことを話すべきだろうか――。
いや、できない、きっと総一郎は、私が未だに孝の部屋に入っていることをとがめるだろう。そして優しいけれど、どこか憐みを含んだような瞳で私を見つめながら諭すはずだ――
（おまえも早く子離れをしなさい）
芳子は、やはり自分の中だけに留めておこう、と考えていた。

第二章　ふたりめ　1

前川と黒田は迷路のような通路をもはや迷うことなく、整形外科病棟のナースセンターに向かっていた。

事件が発生してすでに一週間が経っていたが、依然として犯人に繋がる有力な証言や情報は集まっていない。捜査を指揮する中野指導官の焦燥は日増しに高まり、捜査会議の雰囲気も緊張の度合いを高めている。

捜査対象の範囲を広げる方針が昨日の会議で決定され、主力である県警本部の捜査員達は新しい捜査対象へと担当を割り振られた。

一方で前川ら所轄の捜査員達には、一度捜査した対象を再度調べろ、との指示が下った。しかしながら本部の腕利きの捜査員達がしらみつぶしに調べ上げた後には、もはや新しいネタが出てくることなど期待できない。この期に及んでも、やはり所轄の役割は限定的なものであった。

廊下を歩きながらも、隣の黒田はしきりに後ろを振り返ったり、天井を見上げたりしている。

「黒田さん、どうかしましたか？」

前川が問うも、黒田は応えることなく歩を進める。それでもやはり何かが気になっているのだろう、暫くすると再び周りに目を向けはじめる。

黒田は、他人の質問に応えることが滅多にない。前川あたりが何を訊いても、一瞥すらしないのが通常であった。前川は、それ以上の質問を止めて、ナースセンターへの足を早めた。

開け放たれたナースセンターの扉から中を見ると、偶然にも小倉美奈と目が合った。小倉は「あら」と表情に花を咲かせ、笑顔を浮かべて前川に駆け寄って来た。

「刑事さん、お久しぶりです」小倉は前川に会釈しながらも、後ろに立つ黒田に一瞬視線を向けた。

「もう、大丈夫なんですか」前川は努めて明るい表情を作る。
「ええ、もうすっかり、と言いたいんですけど――、部屋の中に籠っているとますます塞ぎこんでしまいそうで」
小倉は、一瞬だけ泣き笑いのような顔を見せたがすぐに表情を戻して応えた。
「そうですか――、そんなお気持ちのところ誠に恐縮なんですが、もう少しお聞かせいただきたいことがありまして」
小倉の後ろで咳払いがした。目を向けると中年の看護師が前川らを睨んでいる。
「ごめんなさい、お昼休憩のときなら時間作れますので、そのときにでも又、いらしていただけますか」
小倉は申し訳なさそうな表情を見せると、くるりと背中を向けて中年の看護師のほうに早足で向かった。
前川は、誰とはなしに部屋の中に会釈をして、ナースセンターを離れようと振り返った。
前川の後ろに立った黒田が斜め上方に視線を引き絞っている。釣られて前川も視線を追った。視線の先には防犯カメラが見える。“あの”黒い影を捉えた防犯カメラだ。
黒田は急に視線を正面に戻した。前川を押しのけてナースセンターの中に足を踏み入れる。
「あ――、ちょっと黒田さん」声を掛ける間もなく、黒田は歩みを進めた。ナースセンターの真ん中で立ち止まると、部屋の中を見渡す。
「何なんですか、あなたは！」前川達を咳払いで追い返した中年の看護師が腰に手を当てて黒田を見上げている。
黒田は、とがめられているのもいっさい構わず、防犯カメラを見ていたときと同じ表情で、ゆっくりと首を左右に動かしている。他の看護師達はあまりに異様な黒田の風体に、驚きと怯えの混じった表情を浮かべている。
金切り声を上げている中年看護師を黒田がジロリと見下ろすと、

声はぴたりと止んだ。黒田は「失礼した」と一言残して部屋を出る。
前川は、大股でナースセンターから離れる黒田を早足で追った。
「黒田さん、どうしたんですか？」
黒田は相変わらず応えない、ますます足を早めてどこかに向かっているようだ。
「たまには僕の質問に応えてください！　僕だってこの事件の捜査員です！」
前川は、ここが病院であることも忘れ、思わず叫んでしまった。自分の声の大きさに驚き、歩みを止める。
気が付くと前方の黒田も立ち止まっていた。ゆっくりと振り向き前川に視線を合わせた。
「ここは、全部見られている」擦れた声で呟いた。
「――どういう、ことですか？」前川はごくりと唾を飲み込んだ。
「前川、お嬢さんの相手はお前に任せる。俺は別にやることができた」
黒田はやはり前川の問いに応えることなく、再び早足で廊下を進んで行った。底の擦れた黒田の靴音がリノリウムの廊下に響いている。

第二章　ふたりめ　2

黒田康司は、事務局の扉から出てきた若い男を呼び止めた。呼び止められた男は尋常でない黒田の風体に怯えた表情を見せた。
「事務長の近藤さんに会いたいんだが」黒田は警察手帳を開いて男に示す。
「し、少々お待ち下さい」男は脱兎のごとく出てきた部屋に戻った。
黒田は扉から少し離れて近藤を待った。待っているわずかな間にも事務局にはひっきりなしに人が出入りしている。
やがて、ハンカチで額を拭きながらでっぷりとした巨体の近藤が出口に現われた。
「お待たせいたしました」突然の黒田の訪問に困惑した色が浮かんでいる。
「忙しいところ申し訳ないんだが、少し時間をもらいたい」
「刑事さん、今は一日の中でも一番忙しい時間帯でして、できれば他の時間においでいただけないかと」
近藤は「この状況を見ろ」とばかりに左右に視線を振りながら応える。
「常に俺たちの用件は緊急なんだよ、事務長さん、あんた人ひとり、この病院で死んでるっていう事実をどう受け止めてるんだ」
黒田は低く呟くと近藤を威圧するように見下ろした。
近藤の表情は見る間に青白くなった。黒田に凄まれて平静を装うことのできる者は少ない。
「わかりました。それではどうぞこちらへ」
近藤の後に従いて、黒田は奥の会議室に入った。
「刑事さん、申し訳ありませんが本当に時間がありませんので、できれば手短に願いたいのですが」
近藤はパイプ椅子を黒田に勧めながら、自身も腰を下ろした。椅子が軋みを立てる。

「あんたが出し惜しみしなければ、すぐに終了だ」
黒田は表情を変えず椅子に腰かけて、長い脚を組んだ。
「それで、ご用件とは？」
近藤は黒田の言葉には付き合わずに用件を促す。
黒田はポケットから煙草を取り出して火を点けると、顔を近藤の真近に寄せる。
「お宅のところの院長さんは覗きが趣味なのかい？」
「何を仰っているのですか？」
近藤は、煙草の煙と口臭に顔を歪めながら応えた。
「覗きが趣味でないのなら、この病院の尋常でないカメラの数はいったい何なのだ？」
黒田はさらに顔を寄せた、凶暴な顔がさらに恐ろしく歪む。
「ですから、この病院の複雑な構造を補うために、防犯と患者さんの安全上の理由で――」
「室内にはカメラを設置していないとのことだったが、実際のところは個室を含めて、ほぼ全室に設置しているな。誰が見ているんだ！」黒田は近藤の言葉に被せて語尾だけを爆発させた。掌で机を軽く叩く。
「け、刑事さん、何なんですか、もう――」
近藤は絞り出すように言葉を継いだ、全身から滝のように汗を流している。
「近藤さん、私は別にカメラの件を取り上げて、どうこうしようとは思ってないんだよ。お偉い先生だからいろいろストレスも溜まるんだろうさ。ただ私がこの病院の構造的な秘密を少しだけ知っている、ということは頭の片隅に入れてもらった上で、話を聞いてほしい」
黒田は一転して言葉と表情を和らげた。
「刑事さんはいったい何をお知りになりたいと――」近藤は俯きぎみに視線を向ける。
「澤田病院を設計・施工している業者を教えてもらいたい」

近藤のたるんだ顔が一瞬にして引き絞られた、もはや頭頂から流れる汗を拭うこともしない。
「それは――、理由を教えていただけませんか？」目の奥にわずかに光が浮んだ。
「捜査上の理由だ、それ以上は無理だな」黒田は無表情に煙を吐きながら、慎重に近藤の表情を観察していた。やはり病院の構造には重大な何か、が隠されているようだ。
「俺は一度目を着けたことは徹底的に調べる。あまり面倒なことはしたくないんだよ」
黒田は、いつでも破裂しかねない雰囲気を滲ませながら声を一段と低める。
近藤は俯いて何事かを考えている、もう一息だろう。黒田は立ち昇る紫煙越しに、近藤を見ていた。

第二章　ふたりめ　3

宮田真樹が澤田総合病院の個室に入院したのは、今から一週間前、ちょうど病院内で山下沙織が殺害された翌日であった。
男友達の運転する車の事故に巻き込まれたという真樹の症状は、肋骨骨折と頚椎の捻挫であり、全治一カ月と診断されている。
首の周りを白いギブスで固定された真樹は、ピンクのパジャマ姿でベットから上半身を起こし、見舞客の女性に整った顔を歪めている。
「もう、たまんないわよ、いい迷惑。絶対アイツの車なんか乗ってやらないんだから」
「でも、学年末の試験が終わった後で、よかったじゃない。いまどき四年制大学で女の留年生なんて、どこも就職できないんだから」
見舞いの女性は真樹の大学の同級生なのであろう、なだめるような笑顔で真樹に応えている。
「それよりも、相変わらず真樹はモテるわね、すごいじゃない」
女は真樹の機嫌を覗うように話題を変えた。部屋のあちこちに置かれた生花をぐるりと見廻した。
宮田真樹は美しい女だ。男が十人真樹を見れば、十人が彼女のことを美人と称するであろう。癖のないライトブラウンの髪を肩まで伸ばし、小ぶりな顔の半分を占めようかというほど、大きく黒目がちな瞳、小さくぽってりとした唇の間からは白く、並びの良い歯がのぞいている。
「でも、全然駄目、なんだか頼りなくって。やっぱ綾香と違って、男はうんと年上のほうが私にはいいみたい」
真樹は肩をすくめた。
「さては、いいオトコ見つけたな」綾香と呼ばれた女は悪戯っぽい笑顔で真樹に顔を寄せる。
「う～ん、惜しい人はいるんだけど」真樹は尖った顎に人差し指を

一本立てて、口をすぼめた。
「誰だれ？」綾香は、ますます目を輝かせて顔を近づける。
「う～ん、院長先生」
「ええ～！　院長先生って、ここの？　だって――年いくつ？」
綾香は素っ頓狂な声を上げたが、自分の声に驚いたように両手で口を押さえた
「六十歳って言ってた。還暦？」真樹は首を傾げながら応えている。
「おそるべし宮田真樹、君の男の趣味はついにそこまで進化したか」
「だから～、惜しいって言ったでしょ。いくら私だって、そこまで守備範囲広くないわよ」
真樹は顔の前で手をひらひらと振った。
「でしょう、ああびっくりした」綾香も大袈裟に胸に手を置いて、息を吐く仕草を見せる。
「実はね、私が狙ってるのは――院長の息子」真樹は悪戯っぽい笑みを浮かべながら片目を閉じた。
「あー！　やっぱりぃー！」綾香は真樹を指さしながら、嬉しそうに再び声を上げる。病室が再び、放課後の教室のような賑やかさを帯びてきた。
「宮田さん！　病室内では騒がない！」
突然、中年の看護師が扉を開けた。整形外科病棟の看護師を束ねる後藤珠代婦長だ。
「あ、婦長さん、ちょうどいいところに来た。ねえ、婦長さん、澤田院長の息子さんって、医科大の三年生って聞いたんですけど、やっぱりこの病院を継ぐんですよね」
真樹は後藤が入って来たことが幸いとばかりに、全く悪びれることなく問うた。
「――あなたそんな話、誰から聞いたの？　そんなこと貴方に関係ないじゃない」
後藤は一転、声を潜めた。瞼の肉が垂れて、いつも眠たそうに見える目がさらに細められている。

「関係ないですけど、なんか興味あるじゃないですかぁー。後藤婦長さんお願いします。澤田院長の息子さん、私に紹介してもらえませんかぁー」

語尾を上げた甘えるような真樹の口調も、独身のまま社会の荒波を生き抜いて来た後藤には全く通じていないようだ。真樹の申し出を無視して「とにかく病室では静かに」と言い置くと、背中を向けて部屋を出て行った。

第二章　ふたりめ　4

澤田芳子が病院を訪れたのは久しぶりであった。自宅に籠って、孝の部屋で見つけた“あの”恐ろしい本のことを考えると、居ても経ってもいられなくなる。

数日後、再び孝の部屋に入ったときは、既に“あの”本は無かった――。と、いうことは孝自身が“あの”本をどこか別の場所に移動させたのか、あるいは鞄の中に持ち歩いているのか？　やはり“あの”恐ろしい本は孝の愛読書であったのだ！

芳子は迷路のように入り組んだ病院の廊下を歩きながら、又、そんなことを考えていた。

自分の主人が院長を務める病院内で起きた「猟奇的殺人事件」、そして事件の翌日、息子の部屋の中に隠すように置かれていた「猟奇的殺人」に関する本、そしてその本の中に収められた残酷な写真の数々――

果たしてこれは偶然なのだろうか――？　まさか息子に限って――！

もはや、芳子はこの恐ろしい考えを自らの中に留めておくことはできなかった。例え、どんなことを言われようと、主人の総一郎に相談せずにはいられなかった。

「あら、奥様お久しぶりです。もうすっかりお身体の方は宜しいんですか？」

小太りの看護師が笑顔を見せて近づいて来た。芳子の知らぬ顔であったが、相手は自分のことをどうやら知っているらしい。胸元の名札を見ると《後藤》とある。

でも、この人は何を言っているのだろう。私は此処のところ、病に伏せったことなどないのだけれど――

芳子は訝しがりながらも、微塵も表情に表すことなく微笑み、院長夫人としての品格を保ってみせた。

《私が狙っているのはねぇ～、院長先生の息子！！》
病室の中から若い女の声が聞こえた。院長という言葉に反応し、芳子は声の上がった病室の扉に目を向けた。
《あー！　やっぱりぃー！》
別の女が叫ぶ。後藤も目を向けると、ノックもせずに、ものすごい勢いで部屋の扉を開けた。
「宮田さん！　病室内では騒がない！」
芳子は病室の扉の脇に張られた、名前のプレートを見た。
“みやた　まき”
芳子は声に出して名前を読んでみた。開いた扉の間から中の様子が見える。髪を金髪に染めた派手な顔の女がベットに上半身を起こしている。
《後藤婦長さんお願いします。澤田院長の息子さん、私に紹介してもらえませんかぁー》
再び、甲高い耳触りの悪い声が響いた――
（なに、あの女、孝のことを知っているの――？　まさか、孝があんな頭の悪そうな女と知り合いだなんて、在りえないわ。そうよ、日記にも何も書かれていなかった――私はあんな女のことは知らない――）
芳子は頷き、女から顔を背けるように視線を外した。そして何事もなかったかのように前を向くと、再び歩き始めた。

第二章　ふたりめ　5

「芳子、僕も一応、仕事中なのでね。事前に電話くらい貰えると有難いんだが――」
総一郎は、書類から目を上げ、眼鏡を外しながら立ち上がった。
「ごめんなさい、あなた。でも、どうしてもお話ししなければならないことですの」
芳子は、総一郎の執務机の前に設置されたソファに腰かけたまま頭を下げた。
「なにがあったのだい？」
総一郎は、突然の訪問をそれ以上とがめることなく、向かいのソファに移動して腰を下ろした。芳子を見る目は相変わらず柔らかい。
「それが――、孝のことなの」
「うん――？」総一郎の表情に僅かに影が浮かんだ。
「あなたには、叱られるかもしれないけれど――、この前、孝の部屋を掃除していたとき本棚の中に変な本が隠してあるのを見つけたの」
「――それで？」総一郎は、ため息まじりにソファに背を預けた。叱られる――と、芳子は感じた。自然と視線が下がる。
「あなた、怒らないで聞いて下さいね。それでね、その本の題名が『猟奇的殺人研究』なんて恐ろしい題名なものだから、私、中を開いてみたの、そしたら――」
「中身は恐ろしい死体の写真ばかりだったのだろう」
総一郎が、言葉を被せた。芳子は、はっとして顔を上げた。
「どうして――？」
「芳子、君が見た本は、僕の蔵書だよ。いつもは執務室に置いてあるんだが、あんな事件があったからね。過去の類似事件の研究を私なりにできれば、と思って自宅に持って帰ったのさ」
「それじゃあ、孝は――」

芳子は、心が晴れて行くのを感じていた。やはり、あんな恐ろしい本は孝のものではなかったのだ、やはり孝は、医学の研究のために――

「芳子――」総一郎はソファから背を離し、両肘と両膝を付けるようにして芳子に上体を寄せた。

芳子は、総一郎の顔を見た。眉の間に縦皺を寄せて、悲痛な表情で視線を向けている。芳子には総一郎の言わんとすることが、わかった。

「芳子、もう、いいかげん――」

「待って、わかったわ、あなた」今度は芳子が総一郎の言葉に被せた。

「あなたの仰りたいことは、よくわかります。だから、だから――、もうしないわ。孝だって、もう大学三年生ですものね。私も子離れするわ」

芳子の言葉に、総一郎は何か言いたげであったが、やがて笑みを浮かべて「そうか」とソファに背を預けた。

「お忙しいなか、ごめんなさい。私、これで失礼いたしますわ」芳子は立ち上がると、扉に向かった。

「ああ――」

扉のノブに手を掛けて、ふと芳子は振り返った

「あなた、今日も遅くなりそうなの？」

「ああ、多分ね――」

「そう、あまり無理なさらないで下さいね。孝も心配してるわ」

総一郎は何も応えず、笑顔で手を上げた。

「じゃあ」芳子はゆっくりと閉じていく扉の間から、総一郎が大きなため息とともに表情を戻すさまを眼の端で見ていた。

第二章　ふたりめ　6

深夜三時過ぎ、前川の運手する捜査車両は再び、澤田総合病院の玄関までの坂道を上っている。比較的寒い日が続いたせいか、今年は桜の散りが遅い、道の両側には暗闇の中、白い花がゆらゆらと揺らめいている。

捜査車両を玄関前に停めた。既にパトカーが数台停車している。職員口を抜けて、現場に向かう。もはや見取り図を見る必要もなかった。今回の現場も、前回と同じ、整形外科病棟の中であった。

「これは、えらいことになるぞ、前川よ――」病院内を早足で進みながら、板井が呟いた。

「勿論、前回から一週間しか経ってませんからね」前川は、先を進みながら応える。

ナースセンターの角を右に曲がり、曲がりくねった廊下を進む。人だかりをかき分けて、中に入る。立ち入り禁止のテープの向こう側に制服姿の警官が立ち、さらにその奥、部屋の入り口全部を青いビニールテープが覆っている。

廊下のライトは点けられ、さらに照明灯が数本、現場付近の廊下を照らしている。紺色の制服を着た鑑識課員が数名、青いビニールの外で何をするともなく立っている。

「おお、おせえぞ」相変わらずのべらんめえ調で須崎が顔を向けた。眉根を寄せ、珍しくイラついている様子である。

「いや、急きょ大場町の変死現場に行くことになっちゃいましてね。これでも、すっ飛んで来たんですよ」板井が須崎の背に軽く手を当てて頭を下げた。前川も板井の後方で頭を下げる。

「えらいことだぜ」須崎は先ほどの板井と同じ言葉を呟いた。

「まだ、始まってないんですか」板井は須崎の肩越しに現場に目を遣りながら問うた。

「まだ、本部の指示が降りてねえんだ、たぶん、本庁が出張ってく

るんだろう」須崎は頬に手を当てながら応える。
前川ら、所轄の捜査員は本部の指示なくしては現場に足を踏み入れることはできない。本部の許可が下りるまでは現場保存が最大の責務となるのである。
「本庁って――？」前川が会話に割り込む。
「桜田門さまだよ、警視庁捜査一課。県警本部とは犬猿の仲だ」板井が表情を歪める。
なるほど、さきほどから須崎や板井が「えらいことだ」と言っているのはそういうことなのか、と前川は見て取った。
「ちょっと、中いいですか？」
「まあ、本来のところはだめなんだが、ちょっとくらいならいいだろう」板井の言葉に、須崎はしゃがみこんでビニールシートを手に取った。そのままの姿勢で前川に顔を上げ
「おい、前川、今回は前よりひでえぞ。ぶっ倒れるなよ」と笑顔を見せた。
引き上げられたビニールシートから前川と板井が顔を覗かせた。途端、鉄分と生臭さが混じった濃密な血の臭いが鼻孔を襲う。
「うあ、こりゃあひでえ――」板井が呟き絶句した。
前川は呼吸を整え、ゆっくりと現場を眺めた。現場は個室であった。手前に小さなソファとテーブルが一つずつ設置され、正面の窓際にベットが設置されている。
被害者はベットの上に横たわっていた。白いベットやパジャマが血で赤く染まっている。
首は――、首はある。若い女性だ。目を見開き、歯を獣のように剥きだした表情のまま固まっている。前川はそのまま視線をゆっくりと頭部から胸元、腹へと移動させてゆく。
被害者には下半身がなかった、否、下腹部のところから真っ二つに切断されていた。
腹部からは、蛇のようなはらわたがとぐろを巻くように大量にはみ出し、まるで巨大な蛸が寝そべっているかのような様相を呈してい

る。まだ凝固しきっていない血液がベットから床に落ちて血だまりを作っている。
「ありゃあ、はらわた引っ張り出されてるな、普通じゃああはならねえぞ」板井が前川の横に顔を並べて呟く。
前川は、こみ上げて来るものを必死で抑えながら、目を床に向けた。切断された下半身は床の上にあった。臀部を床に付けて両脚を伸ばし、まるでそれだけで床に座り込んでいるように見える。
前川は呼吸を整えながら現場を観察していたが――限界であった、口を押さえて、トイレに走った。
背後から須崎の「なさけねえ」という声が聞こえた。

第二章　ふたりめ　7

夜が明けると澤田総合病院の周りには、前回にも増してマスコミが詰めかけた。

テレビは、ひっきりなしに現場となった澤田総合病院の病室の窓や、ヘリから全景を俯瞰（ふかん）した映像を映し出し，いつの間にか犯人は「病院の殺人鬼」と呼ばれるようになった。

結局のところ、警視庁と神奈川県警との合同捜査本部の設置は見送られた。しかしながら県警本部は威信を掛けて本件に取り組むとの意思表示として、従来の倍近い捜査員を投入し、捜査に当たることを決定した。

捜査本部の入り口に「澤田総合病院連続殺人事件捜査本部」と黒々と書かれた看板をマスコミのフラッシュの中、制服姿の副署長が取り付ける。

捜査会議は午後八時からと決定された。前川が板井と伴に本部の設置された会議室に到着したのは開始時間の十五分ほど前であるが、既に会議室には捜査員達が隙間なく腰を下ろし、書類に目を落とすもの、隣の捜査員と談笑するものなど様々に会議の開始を待っていた。

本部内を見回すと、後ろの席で須崎が手を上げているのが見えた。緊張した面持ちで近づく。

「どうも、ご苦労様です」

須崎の隣に板井、前川と腰を下ろした。

「すごい人数ですねえ」前川は周りを見渡した。

「ここまで大きい捜査本部はそうそうないぜ。俺だって初めてだ」板井が応える。

雛壇には、坂巻警視正刑事部長以下、本部の幹部連が前回以上に顔を揃え、口を真一文字に結んで腰を下ろしている。

雛壇の両脇には黒板が一つづつ置かれ、向かって右側の黒板には

被害者氏名、犯罪発生日時、死因などが箇条書きされ、左側の黒板には、死体や血痕の位置などを示した犯行現場の見取り図が貼り出されている。
「上野毛課長の姿がないですね」いつも雛壇に顔を並べる上野毛の姿がない、前川が問うた。
「あそこだよ」板井が席の真ん中辺りを指差した。見ると見覚えのある薄い頭髪の後頭部があった。
「これだけ本部のお歴々が揃ってる中じゃ、いくら上野毛課長だってペーペー扱いだよ」
「そんなものですか」前川の呟きは、会場内のざわめきの中に吸い込まれた。
「気を付けっ！」雛壇に座っていた中野有次指導官が立ち上がり、気合の入った号令を発した。本部内が水を打ったように静まる。
「お互いに礼！　着席！」
続けて本件の指揮官となった中野はいつにも増して表情が厳しい、剃刀のように細い眼の奥に尋常ならざる光が覗いている。
坂巻警視正刑事部長、捜査一課長の訓示の後、中野は声を上げた。
「こちらから司法解剖の結果を伝える。マルガイは宮田真樹、二十一歳、身長百六十八センチ、体重五十キロ、血液型B型。死因は胴体部割創からの出血多量による失血性ショック死。死亡推定時刻は本日の午前一時から二時。創洞（そうどう）内部はかなり複雑に傷ついており、両手で何回も内部を掻き回され、大腸が引きずり出されている」
会場にざわめきが起こる。前川の脳裏に、蛸（たこ）のように大腸をまき散らした宮田真樹の姿が過ぎった。胃液がこみ上がり、口の中に酸っぱい、嫌な感覚が広がる。
「凶器はある程度厚みのある大型で鋭利な刃物、斧であるとか日本刀といった類によるものだ。ベッドで仰向けに寝ていたマルガイを大上段から一刀のものに切断したと考えられる」
「バケモンだな、こりゃあ――」前川の横で板井が呟く。
「須崎さん、人間の胴体ってどうなんですか、やはり切断すること

は難しいものなんでしょうか」
前川は問うたが、須崎は応えない。唸りながら腕を組んでいる。
「ここまでで質問あるか」
特に挙手はない。中野は会議の手順に従って、被害者の身辺調査を始めとした各班の捜査結果の発表を促した。
各班の班長が次々に立ちあがり捜査結果の発表を行う。捜査対象は素行不良者・前歴者、マル暴、さらには少年や薬物関係者まで拡大されたが、犯人に結び付く有力な情報があがることはなかった。
一通り報告がなされた後、中野が雛壇の一番端でノート型パソコンを開いている若い捜査員に目顔で合図を送る。
「今回も、ホシと思われる者の映像が防犯カメラで捉えられている。それを皆に見てもらう――」
中野が声を上げると同時に、背後の液晶スクリーンが煌めきはじめ、やがて薄暗い廊下の映像が浮かび上がった。

第二章　ふたりめ　8

翌朝、前川は県警捜査一課の田端幸作を助手席に乗せて、青葉署から澤田院長の自宅に向かう車を運転していた。

三十代半ばと思しき田端はよく喋る男であった。破裂しそうな風船のように膨らんだ顔と身体からは想像できないほど早口で話し続ける。

前川は気難しい相手とコンビを組むよりも幾分かマシだと感じたが、モノには限度がある。田端の話は耳障りなＢＧＭと考えることとした。

「ところでなあ前川君、君、どう思った？　アレ」

視線を感じた前川は、一瞬目を向けた、田端と視線が合わさる。

「――アレ、と言いますと？」

田端の視線を横顔で感じながら、突然の問いに質問で切り返した。

「何だ君、俺の話を聞いてなかったのか？　ホシの映像だよ、どう思ったよ、あのバケモン」

（ええ、全く聞いていませんでした）という言葉を呑みこんで、前川は「すいません」と愛相笑いを浮かべた。

「あれはなあ、殺人というものに何の罪悪感も感じない類の人間だよ」

「はあ――」

前川は（何であれだけの映像でそこまで――）という言葉を再び呑み込んだ。

新たに防犯カメラが捉えた犯人の映像も、パーカーを目深に被り、部屋の前で刀を鞘から抜いて――と、前回のビデオの角度を変えて撮影されたものか、と思えるほど内容に変化はなかった。

田端は前回の事件には捜査本部に参加していない。今回の会議で初めて「病院の殺人鬼」の姿を目の当たりにしたのだ。

目にしたもの全てが犯人に関する感想を口にしたくなる――「病

院の殺人鬼」はそれほど特異で異様な雰囲気を纏っていた。
「ありゃあ、サイコパスだな、うん、サイコパス」
「サイコ、パスですか――」両腕を組んで頷いている田端を横目に、前川は呟いた。
サイコパスとは、連続殺人鬼の多くが属するといわれれている人格障害で、サイコと略されることもある。
その特徴として良心が“異常に”欠如している、行動に対する責任を“全く”取ることができない、罪悪感が“全く”ない、などが挙げられているが、なにより恐ろしいことは、サイコパスの多くは通常の社会生活を営んでおり、外見や会話の中から見分けることが全くできない点にある、と言われている。
なるほど、確かに映像の中の犯人の落ち着きぶりは、犯罪を犯したという意識が全く感じられない。黒い影が画面の下部にゆっくりと移動していくさまが前川の瞼を過ぎった。
「しかし、何者なのでしょうか、刀剣の扱いも玄人はだしのようですし、なにより尋常でない怪力なんて――」
前川は背中に走る悪寒を打ち消そうと、言葉を継いだ。
二番目の被害者、宮田真樹は一刀のもとに胴体が切断されていたが、振り下ろされた凶器の、あまりの衝撃に上半身の広範囲な部分が複雑骨折を起こしていた。司法解剖を取り行った医師が、敢えて「ものすごい力」と報告書の中で付け加えたほどである。
「化けモンだよ。サイコパスの化けモン、死んでもお出会いしたくないもんだな」
田端は両手を頭の後ろに組んで背を反らせた。
車は散りかけた桜の樹の間の道を進んでいた。病院の前を通りすぎると、やがて塀に囲まれ樹木の緑がこんもりと茂った澤田総一郎の居宅が見えてきた。
「かーっ、豪邸だねぇ。さすがだな」田端が呟いた。
フロントガラスから降り注ぐ春の陽光の中、前川はゆっくりと澤田邸の正門の前で車を停めた。

第二章　ふたりめ　9

青葉署の黒田康司は、三英設計事務所のエントランスフロアのソファにひとりで腰かけていた。上着のポケットから潰れた煙草の箱を取り出して中を探る、くしゃくしゃになった一本を取り出して火を点けた。

捜査員は常に二人で行動するのが大原則である。しかしながら黒田はコンビを組んだ県警の捜査員に一種の取引を持ち出した。捜査本部を出るときと戻ってくるときだけ時間を合わせて、それ以外は全くの別行動にしないか――と。

県警本部においても黒田の噂は響き渡っていた。身勝手で、組みにくい相手の典型のような男――、黒田の提案はすんなりと受け入れられた。

煙を吐きながら周りを見渡す。高い天井、磨きこまれた床、適度な間隔を置いて設置された一人掛けのソファには、他にも商談待ちと思われるスーツ姿の男達が数名、腰を下ろしている。五階建ての自社ビルといい、設計事務所というより企業のエントランスの様相である。

灰を落とそうと灰皿を探すが見当たらない、黒田が受付に目を遣ると、怯えた表情の受付嬢が慌てて目を逸らした。

斜め後ろから携帯用の灰皿が差し出された。黒田が振り向くと、小太りの銀縁眼鏡の男が口元に笑みを浮かべて立っていた。

「刑事さん、こちらでの喫煙はご遠慮いただいておりますので」

目だけが笑っていない典型的なサラリーマンの笑顔であった。黒田は差し出された灰皿に煙草を投げ込むと、ゆっくりと立ちあがった。警察手帳を開いて身分証明を見せる。

「青葉署の黒田です」

全身黒ずくめの服装で百九十センチを超える長身の黒田に、男の笑顔は見る間にひきつっていく。

「し、失礼いたしました。総務課の相沢でございます。ご案内いたしますので、どうぞこちらへ」
相沢は米つきバッタのように何度も頭を下げながら、半身になって前方を指し示した。黒田は黙って頷き、相沢の後ろをゆっくりとエレベータホールに向かう。
社長室はエレベーターを最上階の五階で降りた真正面であった。
「こちらでございます」相沢がマホガニー材の重厚な扉を開いて体を退かせ、黒田を社長室に導き入れる。
黒田は社長室に足を踏み入れ、室内を見渡した。広い、恐らく五階のワンフロア全てが社長室として使われているのだろう。壁には設計した建物の写真がいくつも飾られ、部屋の真ん中に高層ビルの大きな建築模型が鎮座している。
窓際に設置された執務机のほうから貧相な小男が近づいてくる。
「黒田さん、ですね。まあ、どうぞお入り下さい」
薄い頭髪に大きな頭、乱杭歯ぎみの口元、線をひいたように細い目に、貧相と表現してもよい体躯、とても一代で設計事務所の業容を拡大させたヤリ手経営者には見えない。だが、間違いなく彼こそが三英設計事務所の代表取締役、三田栄吉であった。
黒田は下がる相沢に目顔で挨拶すると、三田が指し示すソファのところにゆっくりと歩みを進めた。
「青葉署の黒田です」黒田は名刺を取り出して三田に差し出した。
「まあ、どうぞお掛け下さい」三田は名刺を受け取り、着席を促した。
黒田はソファに浅く腰を下ろすと、両肘と両膝を付ける形で上半身を三田に寄せる。
「それで――、青葉署の刑事さんが私共に御用とはいったいどんなことでございましょう」
三田は、黒田の向かい側のソファに深く腰を下ろして肘掛に両手を広げ、ゆったりとした笑みを浮かべながら問うた。
「澤田総合病院の設計図面を見せていただきたい」黒田は単刀直入

に応えて、三田に視線を当てた。
「澤田総合病院の図面ですか――？　それはいったい何のために？」
三田は表情を変えず笑顔のまま、再び問うた。
黒田は視線を三田に向けたまま、ゆっくりと煙草を取り出し火を点ける。
「詳しくは言えない、捜査上の問題なのでね」
黒田の応えに三田の笑顔が消えた。黙って視線を黒田に返す。
「お宅は、澤田院長とは幼馴染みだと聞いたが――」黒田は視線を外さない。
「ええ、そうです。それが何か？」三田の片眉が僅かに上がる。
「澤田総合病院の増築は全て、あんたのところが引き受けているようだが、随分いい商売になったんじゃないのかい」
黒田は言葉を区切った、だが三田は何も応えない。
「あんたの事務所がここまで大きくなれたのも、澤田院長のおかげ、ってわけだ」
黒田は部屋の中を見渡す。
「仰りたいことの意味が分かりかねますが」
三田の眼の間に僅かに敵意の光が漏れている。
「言葉どおりだよ。ただでさえ消防法ギリギリの複雑な構造の上に、さらに公開していない設備や構造を備えているな、澤田病院は――」
黒田は煙草の煙を仰向いて吐くと、眼に尋常でない光を湛えて言葉を継いだ。
「お前のところは、違法設計と建築を引き受けることで澤田病院の増築を独占的に受注してきたんだろう」
「ばかな――！　何を根拠にそんなことを」三田の頬が紅潮した。
「三田さん、澤田総合病院は多分、長くない。いや、病院は存続しても澤田院長はもう無理だ。あんた、澤田さんと、この事務所心中させるつもりかい？」
黒田は顔を寄せ、声を潜めた。
「澤田院長が？　何故だ？」三田の表情が大きく歪む。

「それは――、ここだけの話として教えといてやる。だが、あんたもこの話を聞いたからには俺に協力してもらうぞ、いいな」
不安げな三田の表情を眺めながら、黒田は両手を肘掛に広げてソファに埋まった。

第二章　ふたりめ　１０

「孝、あなた最近、帰りが遅いことが多いけれど大学の勉強のほうは大丈夫なの？」
　澤田芳子は、部屋の入口に立ったまま息子の孝に声を掛けた。
「大丈夫だよ、母さん。僕は最後にはきっちり辻褄合わせるタイプだから」
　孝はベッドに腰を下ろしたまま、笑顔を見せる。
「でもお父さんも心配してるわよ。最近孝をちっとも見かけないけれどちゃんと学校行っているのか、って」
「我が家の両親は息子に対する信頼がないなあ。僕は今まで父さんや母さんの期待を裏切ったことがある？」
　孝は芳子によく似た丸顔をしかめて不満を表明している。
　確かに孝は、今日まで芳子や総一郎の期待に違わぬ進路を進んできた。総一郎の勧める剣道でも県大会で優勝するほどの優秀な成績を残し、勉学においても現役で慶応の医学部に入学した。まさに文武両道、澤田総合病院の跡継ぎに相応しい息子である。
「まあ、それはそうだけれど――」芳子は反論できなかった。
（ほんとに、年々口が達者になっていくわ）
　芳子は思いながらも、そんな憎たれ口をきく孝を柔らかく微笑んで見つめた。逞しい青年に成長した息子が愛おしくてたまらなかった。
「ああ、そうだ。母さん、最近僕の部屋に入っただろう？」
「え――？」
「母さんは僕が気が付いていないと思っているのだろうけれど、生憎、僕はそんなに鈍感じゃないよ」
　芳子は何も応えられない、ただうろたえるばかりであった。
「母さん、そんな顔しなくてもいいよ。別に見られて困るようなものは置いていないから。でも、いくら親子とはいえ、勝手に色々覗

かれるのはあまり気持ちのいいものじゃないから――」
「そんな、覗くなんて私は――」芳子は顔を赤らめた。
「はい、この話はおしまい。それで？　何？　僕に用があったんでしょう」
孝は一転、丸顔の愛くるしい笑顔を見せて芳子に問うた。
そうだ、今日は孝に“あの本”のことを尋ねようと思っていたのだ、そう考えてみると孝が逆に切り出してくれて話しやすくなったと言える。
「実はね、孝。あなたの読んでいた本のことだけれど――」
芳子は伏目がちに孝を見た。孝は邪心のない大きな目で真っ直ぐに芳子を見ている。
「あの、『猟奇殺人研究』とかいう本なんだけど、ほら、お父さんの病院であんな事件があったばかりじゃない、だからきっと何かあなたが研究のためにでも読んでいるのかな、と思ったんだけれど――」
「ああ――」
孝が芳子の言葉に声を被せた。
「あの本を見たの？」発した声は驚くほど低い。
芳子ははっとした。笑顔を浮かべた孝の唇が見る間にねじれていく。
「どう思った？　母さん」孝は俯きぎみに芳子を見る。
「何を？」心臓の鼓動が高まる。
「――素晴らしいだろ、あの本」俯いた額越しに射られた孝の視線は、芳子に真っ直ぐ向かっている。芳子は視線に縛り付けられ、身動きすらできない。
「素晴らしいんだ――」
孝の表情が一変した。虚空を彷徨いはじめた視線は焦点を失い、口元はだらしなく緩んだ。
「孝、あなた――まさか？」芳子は全身の震えが止まらない、、ぬめった汗が体中に噴き出し、膝が震える、立っているのがやっとだ。

「そう、僕だよ、病院の殺人鬼は」
孝はゆっくりと立ち上がった。口元には得体の知れない薄笑いが浮かんでいる。
「気が付いていたんだろう？　母さん」
ゆっくりと芳子に近づいてくる。笑顔には狂気が潜んでいる。
「言ったろう、僕が母さんの期待を裏切ったことはないって――」
芳子は我が子の恐ろしい告白に「ひい」と声を上げ、その場に倒れた。

第二章　ふたりめ　１１

玄関の扉を開けて現われた人物は、意外にも澤田総一郎本人であった。

「お電話いたしました神奈川県警の田端です。本日はお忙しい中、申し訳ありません」

田端幸作は警察手帳を広げて身分証明を示しながら軽く頭を下げた。

「どうぞ、お入りください」

澤田は笑顔を浮かべて身を退かせると、田端と前川を家の中に導き入れた。

「失礼いたします」

前川はさりげなく中を見渡した。玄関の広い三和土（たたき）は掃除が行き届いており、清潔だ。男性用の革靴と女性用のパンプスが一足づつ脇に並んでいる。

正面には大きな花瓶が置かれ、意匠を凝らした花が活けられている。

「これは、又、素晴らしい生け花ですな」

田端が柄にもなく花を愛でる。

「はは――妻が草月流の生け花に凝ってましてね」

澤田は、部屋に案内する背中から横顔だけで笑った。

中庭に面した長い廊下を歩く。家の中はしんとした静けさが漂い、前川らが廊下を踏みしめる音だけが静寂の中に沁み入っていく。

床は埃一つなく磨きこまれている。これだけの広い家をここまで清潔に保つのは大変な労力であろう。お手伝いも何人か雇っているのだろうか、などと前川は考えた。

「さあ、どうぞこちらへ」

前川は、案内された応接間のソファに田端と並んで浅く腰を下ろした。

「妻が、少し体調を崩しておりまして、なにぶん私だけでは、お茶のある場所もわかりませんので何もお構いできませんが」
澤田は向かい側のソファに腰を下ろして脚を組む。
「いえ、お構いなく」田端は身体の前に両掌を差し出した。
「奥さまの具合が？」すかさず前川が問う。
「なに、大したことはないのですが、元々貧血ぎみでしてね。今日も朝から気分が悪いと言うので二階で横にさせています」澤田はひらひらと手を振りながら薄く笑顔を見せる。
「澤田院長、今日参りました目的は他でもありません。昨日お宅の病院で発生した事件に関連してなのですが」
田端は上着の内ポケットから携帯端末を取り出した。
「これはあくまでも形式的なことですので、お気を悪くなさらずにお答え頂きたいのですが、院長は昨夜の一時から二時の間はどちらにいらっしゃいましたか？」
「その時間でしたら、もう床に入っていたと思います」
澤田は記憶を辿るように、僅かに上向いた。
「それを誰か証明してくれる人はいますか？」今度は前川が問う。
「証明ですか、困りましたね、妻とは寝室を分けておりますし」
澤田は身体の前で組んだ片方の手で顎を支えながら、眉根を寄せた。
「院長、結構です。これはあくまでも形式的な質問ですので、あまりお気になさらずに」
田端は一瞬だけ前川に視線を向けた。「アリバイなし」と目顔で言っている。
「参考までに、奥さまのほうは、その時間何を？」
「――休んでいました。その日は私の帰りがいつもより遅かったものですから、私が風呂に入っている間に、もう寝室に入っていたと思います」
田端の問いに、澤田は一呼吸おいて応えた。視線は真っ直ぐ向けられている。

前川が言葉を継ごうとした瞬間、二階から「ひい」という悲鳴のような声の後、何かが床に倒れる音が聞こえた。
「今のは――？」
前川の問いに応えることなく澤田が立ち上がった。「ちょっと失礼」と早足で居間を出る、田端と前川も後に続く。
居間を出た正面の階段を上る。上り切った正面の部屋の扉が開いている。中に女性が仰向けで倒れているのが見えた。澤田が駆け寄り、脇に屈みこんだ。
「芳子！　どうした？　大丈夫か？」
澤田は腕を取って脈を取り、閉じた瞼を指で開いて瞳孔を確認している。田端と前川は澤田の後ろに立って二人を見下ろした。
「澤田芳子、院長の奥さんだ」田端が声を潜める。前川は黙って頷く。
「あなた――」芳子が弱々しく呟いて目を開いた、立ち上がろうと上半身を起こす。
「そのままにしていなさい」澤田が肩を抱く。
芳子が澤田の肩越しにゆっくりと視線を動かした。前川達の姿を認めると「あら、お客様ですの？」と再び立ち上がろうとする。
前川と田端は、芳子に軽く頭を下げた。
「芳子、警察の方だ。昨日の病院の件でいらっしゃっている」澤田は顔を横に振って芳子が立ち上がることを制しながら応えた。
「警察――！」澤田の言葉に芳子は再び体制を崩した。見る間に顔色が失われ、唇が震えはじめる。
「刑事さん、申し訳ありません。この通りの状況ですので今日の夕方にでも改めておいでいただけませんでしょうか」
芳子を抱きかかえながら澤田が視線を上げる。
「わかりました。改めてお邪魔させていただきます。奥さま、ゆっくりお休みになられてください」
田端は前川に「行くぞ」と目顔で示す。前川は田端に従い部屋を出た。階段を降りながら再び部屋に目を遣る。

総一郎に支えられた芳子と視線が合った。前川は芳子の目に、意外なほど強い光が浮かんでいることを見逃してはいなかった。

第二章　ふたりめ　１２

「さあ芳子、寝室に戻ろう」
総一郎が肩を抱いて、芳子を立ち上がらせようと促した。
「あなた、警察の方ってどういう用事だったの？」
芳子は立ち上がることを拒否して、床に直接座ったまま総一郎に問うた。
「何、どうということはない。昨夜の事件があった時間、我々がどこにいたかを聞きに来たのさ」
芳子は未だ、迷っていた。“あの”恐ろしい孝の告白を総一郎に伝えるべきだろうか、そういえば孝はどこに？
「あなた、孝を見ませんでした？」
「芳子、お前は疲れているんだ。最近、いろいろと続いているからね。とにかく一度、眠ったほうがいい」
総一郎は芳子の問いに応えず、再び肩を抱いた。
そうだ、孝は真実を告白したのだ、自らの恐ろしい犯罪を告白したのだ、もはや自分独りで何とかなる問題ではない、総一郎にに話さなくては！
「あなた、孝が！　孝が――自分が病院の殺人鬼だと！」
芳子は総一郎の腕を振りほどいて、総一郎に視線を向けた。湧きあがる身体の震えに、食いしばった奥歯が音を立てる。
総一郎は何も応えなかった。表情を変えることなく、ただ芳子の瞳をじっと見ている。視線には夫としての温かさとは正反対の、科学者が何事かを観察しているような、一種の冷徹な色が浮かんでいることを芳子は直感的に感じていた。
「あなた、孝が！　孝は、どこに行ったの？　孝を止めないと！」
総一郎は芳子に顔を近づけ、両肩に両手をそっと置いた。視線には柔らかさが戻っている。
「芳子、わかった。孝のことは僕に任せておきなさい。それよりも

君には休息が必要だ。さあ、寝室に行こう」
総一郎は再び、芳子を寝室へ促した。今度は芳子も逆らうことなく立ち上がった。
総一郎に肩を支えられ、頼りない足取りで芳子は寝室に向かう、まだ、目眩がひどい。
「あなた、孝を、孝を――」
芳子は現実と夢の狭間にいるような感覚の中、ただ呟いていた。

第三章　殺人鬼の幻　1

澤田総一郎は書斎の椅子に腰かけていた。机に両肘をつけて掌で額を支えている。

澤田は苦悩していた。目を固く閉じ、鼻の周りに皺を寄せた表情には苦しみの深さが滲み出ていた。

やがて澤田は顔を上げ、机上の携帯電話を手に取った。ボタンを押して受話器を耳に当てる。目には決意の色が浮かんでいる。

「お疲れ様でございます院長、近藤でございます」

電話の相手は澤田病院の事務局長、近藤義一であった。

「ああ、お疲れさま。病院のほうの様子はどうだい」

澤田はできるだけ平静を装って声を掛けた。

「それが、昨日の件で警察関係者やマスコミの対応に追いまくられておりまして、事務局のほうは通常の業務に支障をきたしておる状況でございます。なんとか院長のご自宅や診療にまで騒ぎの類が及ばないように努力しておるのですが、いかがでしょう？」

澤田の脳裏に、ハンカチで汗を拭くでっぷりと太った近藤の姿が浮かんだ。

「ああ、おかげでこちらのほうに騒ぎは及んでいない、助かるよ」

澤田が応えると、すこしの沈黙の後、近藤が一段低い声で問うた。

「院長、あの刑事はまだ何も言ってきませんか？」

「ああ、まだ何も言ってこない。だが、三田君のところを知ったからには、時間の問題だろう」

「大変申し訳ございません。私の力が及びませんで」

青葉署の黒田と名乗る刑事が三日前、病院の設計・建築を請け負っている業者を教えろと事務局に乗り込んできた、と報告を受けていた。

澤田も黒田という刑事を遠巻きに見たことがある。背が異常に高く、暗い陰影を常に纏っているような不気味な印象の男であった。

「止むをえないさ、下手に隠せば余計に疑われてしまう。それよりも――状態のほうはどうなのだ？」
「はい、ひとまず落ち着いてらっしゃいます。しかしながら、いつまた再び――」
近藤の声は、それ以上言葉にすることがはばかられるとばかりに途切れた。
「そうか、君には苦労をかけて本当に申し訳ないね。私もずっと考えていたのだが、ようやく決心がついた。もはやこれ以上は無理のようだ」
澤田の顔が今にも泣き出しそうに歪み、声が揺れた。
「院長、それでは――？」
「もはや“処置”をするしかなかろう、出来るだけ早いうちに行うつもりだよ」
澤田の応えに近藤の声はなかった。無言で頷く気配だけが届いた。
澤田は窓際に立って外に目を遣った。自宅を囲んだ緑の木々の間から、白い桜の花が揺れているのが見える。桜は盛りの季節を終えようとしていた。
澤田は窓から離れ、書斎を出た。芳子の寝室の前で足を止める、ゆっくりと扉を開けた。
部屋はベージュを基調とした落ち着いた雰囲気でまとめられ、レースのカーテン越しに春の柔らかな陽が差し込んでいる。
ベッドに横たわる芳子に近づいた。薬が効いたのであろう、軽い鼾をかいて眠っている。澤田は芳子の髪を柔らかく撫で、口元に笑みを浮かべると、振り返って出口に向かった。音を立てないように扉を閉める。一階に降りて、屋敷のさらに奥に進んだ。
渡り廊下を通って、木造の古びた作りの棟に入ってゆく、澤田邸の旧宅である。今ではほとんど使われることなく、全ての窓は雨戸で閉じられている。
澤田が旧宅の棟に足を踏み入れることは久しくなかった。長い時間をかけて積み重ねられた闇が澱のように淀んでいる。

澤田はライトを点けた。蛍光灯が驚いたように何度も点滅を繰り返し、黄色っぽい光を放つ。家財道具は何も残していない、ただ、がらんとした空間が開いているだけだ。歩みを進めた、床には埃が溜まり、通った跡が足跡となった。壁に手を付くと指先が黒く汚れた。

澤田はかつての居間を横切り、さらに奥の座敷に進んだ。座敷の一番奥に、巨大な金属製の扉が鎮座している。鍵穴に鍵を差し込む。シリンダーが外れる音の後、両手で取っ手を握り、全力で手前に開いた。

開いた扉の奥は闇であった。澤田はスウィッチを探りライトを点ける。地下へ向かう階段が続いている、階下の底には、やはり闇が横たわっている。

澤田はゆっくりと階段を降りた。埃と黴の混じった臭いが立ち込めている。下るにつれて澤田の全身を、徐々に地下の闇が包んでいった。

第三章　殺人鬼の幻　2

捜査本部の会議終了後、上野毛課長以下、青葉署刑事課の捜査員達は刑事部屋で短時間の捜査会議を開くことが慣例になっていた。管轄内で起こった事件に対する所轄刑事の意地が捜査員達を突き動かしている。

「どういうことだ？」

上野毛刑事課長が問うた。

「そのままです。澤田総合病院は盗撮カメラと抜け穴だらけ、ということです」

黒田は指の股深くに煙草を挟んで、掌を広げたまま喫いつけた。

「上品な顔した澤田院長は、とんだ盗撮マニアだった、というわけかい」

刑事課の係長である須崎が腕組をしながら唸る。

「どうりでホシの逃走経路が防犯カメラに残っていないはずだ」

上野毛の言葉に捜査員達は頷く。

「しかし黒田よ、おまえ何でカメラや抜け穴の存在に気が付いた？」

「勘ですよ、何故か昔から鼻だけは利くんですわ」

黒田は須崎の問いに、煙を吐きながら応えた。黒田の勘の良さは、刑事課の捜査員達は皆知っている。前川は、板井と目を合わせて頷いた。

「と、なるとホシはかなり絞られてくるな。抜け穴の存在を知っているのはどれくらいいるんだ」

上野毛の顔は徐々に上気し始めた、胸ポケットを忙しなく探って煙草を取り出す。

「裏は取れていませんが、恐らく澤田院長、近藤事務局長あたり、その他に数名程度ではないかと」

黒田は相変わらず表情を動かさない。

「課長、報告書まだ伏せときますか？」須崎が片眉だけを上げた。

今、この情報を握っているのは青葉署の刑事課だけだ、本部を出し抜くチャンスでもある。
「しかし、どうしますか、院長の澤田は前川と本部の田端さんが担当してますし、その他にも本部の捜査員が病院関係者に付いてますが」
板井が前川にちらりと目を遣りながら言葉を挟んだ。情報は独占できるが、実際、動く人間は所轄関係者だけではない。
「俺から指導官に話をしてみる。今日の捜査会議の報告でも、病院関係者からはもう新しい情報は出てこないだろうという雰囲気が漂っていたように思う。多分、病院関係者は所轄に任せてくれるだろう」
上野毛の判断に刑事課の面々の顔が俄然輝いた、板井は軽くガッツポーズをしている。
熱気を帯びてきた刑事部屋の中で、前川は独り冷静だった。湧きあがる疑問をどうしても自身のなかで解消することができていなかった。
「ちょっと宜しいでしょうか？」刑事課の一番端の机から、前川は小学生のように手を挙げた。
捜査員達が一斉に振り向く。「なんだ？　どうした、前川」と板井が隣の席からささやく。
「澤田院長は、どうして病院内に盗撮カメラを張り巡らし、抜け穴を作らなければならなかったのでしょうか？」
一瞬、刑事部屋の空間に穴がぽっかり空いたような空白の時間が生まれた。「それはだなあ」と須崎が言葉を継ごうとするが続かない、黒田は無表情で煙を吐いている。
前川の疑問は至極当然であった。しかしながら、久方ぶりの捜査の進展に色めき立ち、すっぽりと全員から抜け落ちていた疑問でもあった。
「その点はまだわからん、まずは澤田院長、近藤事務局長への聞き込み、抜け穴の捜索が第一だ。その中で前川の疑問も氷解していく

だろう」
上野毛は二三口喫いつけた煙草を、アルミの灰皿に押し当てながら応え、刑事部屋に空いた空間を埋めた。
「よし、それでは明日の担当割を決める――」
時間は夜の十一時を過ぎている、青葉署の刑事部屋の熱気が春の闇に染みだしていた。

第三章　殺人鬼の幻　3

澤田芳子は目を覚ました。

見慣れた天井の模様が目に入る。ゆっくりとベッドから上半身を起こした。部屋の隅に置かれたライトが薄いオレンジ色に部屋の中を染めている。

窓には遮光カーテンが引かれ、隙間から陽が差し込んでいる気配はない。芳子はこめかみに走る軽い痛みに顔を歪めながらベッドの時計を見た、一時五十分を指している、どうやら真夜中であるらしい。

芳子はぼんやりと部屋に視線を投げていたが、何かを思いついたように急に目を見開いた。

「そうだ、孝、孝はどうしたのだろう、止めなければ！　孝を止めなければ！」

芳子は呟きながらベッドを抜け出した、白いネグリジェの裾が揺れる。視線は定まっていない。

「でも孝は、すでに二人も殺している。どうしよう、孝が警察に！　そんなことになったらあの子の人生は――！」

ラジオのボリュームをひねるように段々、声が大きくなっていく。芳子は背中を丸めて俯いたまま、部屋の中の同じ場所を何度も円を描いて歩き回る。

芳子の動きは徐々に緩慢となり、円の動きは崩れ、やがて楕円に、無軌道にと変化していく。

俯いていた芳子が顔を上げた。表情に明らかな変化がある。目はこれ以上ないほど大きく見開かれ、口元には得体の知れない薄笑いが浮かんでいる。

「そうだ、私がしたことにすればいいんじゃない、そうよ、私が病院の殺人鬼になればいいのだ！」

語尾だけ叫んで獣のように歯を剥き出した。表情が目まぐるしく

変化する。
芳子はそれまでの緩慢な動きが嘘のように早足で部屋を出た。階下に降りて暗い居間を通り抜け、台所に入る。
引き出しを開けて取り出したものは、刃渡り三十センチ近い出刃包丁であった。芳子は目の高さにかざす、口元に声のない笑いが浮かんだ。
スーパーの白いビニール袋に包丁を包み、芳子は台所を出た。居間を通り抜け、靴を履くことも忘れて、玄関のカギを開けて家の外に出た。思いのほか暖かい。生ぬるい風が頬を伝い、ネグリジェの裾を揺らす。
雲間から満月が顔を覗かせ、庭に長い陰影を落としている。家を囲む分厚い樹木が風を受けてざわめいている。芳子はゆっくりと歩みを進めた。
澤田邸から病院までは歩いて数分である。芳子は人目にふれないように裏道を通り、二十四時間解放されている独身寮と病院との連絡通路から病院内部に入った。
リノリウムの冷たい感触が素足に伝わる。ぺたぺたという足音が暗い病院の中に響いている。
芳子は真っ直ぐ前を見て整形外科病棟に向かっていた。

第三章　殺人鬼の幻　4

後藤珠代は疲れていた。看護師長になった今でも週に一度は当直番をしている。若い時はどうということはなかったが、四十をすぎた辺りから急に体力の衰えを感じるようになった。夜間の病室巡回をしている今も、体がだるい、生欠伸を何度も噛み殺した。

懐中電灯の丸い光がリノリウムの廊下を照らしている。大部屋の扉を一つづつ開いて中の様子を覗う。後藤は何度も夜間巡回を行っているが、どうしても慣れることができない。

病院には怪談話がつきものであるが、看護師の間で語り継がれている怪談話は夜間巡回中の体験談が多いのも納得できる。

人の死が日常的に発生する病院という空間、病棟の闇の中に澱のように積み重なった人々の悲しみや情念が、夜になると壁のそこかしこから染み出してくるような錯覚を後藤は感じていた。

大部屋の巡回を一通り終えて、曲がりくねった廊下を歩いた。若い看護師達が皆、気持ちが悪いと噂している特別室のある病棟である。さらに今では二軒の殺人事件がこの棟で発生している。気味悪がった患者達は次々に退院し、今は数名の入院患者のみになってしまった。

最後の角を左に曲がって、個室病棟の廊下に出た。右側の窓から月明かりが差込み、深夜にもかかわらず明るい。

後藤は月明かりに照らされた青白い廊下の奥に、何者かが立っている姿を認めてぎくりと立ち止まった。目を細めて二三歩、歩みを進める。白い薄手の衣服を着た中年の女が立っている。

「奥さま、ですか？」

後藤は恐る恐る声を掛けた。女がゆっくりと近づいて来た。やはり澤田院長の妻の芳江である。後藤も緊張が解けた笑顔を見せて歩みを進めた。

「奥さま、こんなお時間にどうなさったのですか？」

芳江は何も応えない。ただ、口元に笑みを浮かべたまま近づいて来る。後藤は芳江が右手に何かを持っていることに気が付いた。白いビニール袋に何かを包んでいる。

二・三メートルの距離にまで近づいたとき、後藤は芳江の笑顔にただならぬ気配を感じた。笑顔と見えたのは口角を吊り上げた唇の形からであったが、目は狂気を含んだように大きく見開かれ、反面、黒目が異常に収縮して小さくなっていた。近くで見る芳江の顔は笑顔というより、口の裂けた悪魔の歓喜であった。後藤は冷水を浴びせられたように背筋が冷えるのを感じた。

「奥さま――」

声を上げる間もなく、振り上げられた包丁が芳江の肩口に突き立てられた。すさまじい痛みと熱さが後藤の頭の先まで突き抜ける。

さらに包丁が振り上げられる。後藤は身体をかわして攻撃を避けた。顔を上げた芳江が後藤を見た。唇はやはり笑顔の形のままだ。

「ぎゃあああああ」

悲鳴とも、鳴き声ともつかぬ声を上げて、後藤は逃げようと背中を向けた、だが、今度はその背中に凄まじい痛みが突き刺さった。

「ひいいいいいい」

声にならない声が漏れた。あまりの激痛に体中から力が抜け、そのまま床に崩れ落ちた。床に赤黒い液体が広がっていくのが見える。

個室の扉の一つが勢いよく開く音が聞こえた。

「どうした！」という男の声、続いて「何だお前は！」という弩号。

何人かが争う音が聞こえているが、段々遠のいていく、目の前が霞み、瞼がひどく重い、誰かが肩に手を置いている、「大丈夫か？」と聞こえる。

後藤は意識が無くなる直前、獣のような咆哮を聞いた気がした――

第三章　殺人鬼の幻　5

澤田総合病院からの通報を受けて当直勤務の前川と須崎は捜査車両を走らせていた。

「ちくしょう！　なんで俺の当直の夜ばかりに起こりやがるんだ」

須崎が毒づいた、確かに澤田病院での犯行は、全て須崎が当直司令の夜に発生していた。

「しかし、マルヒ（被疑者）が確保されていると言ってましたが」

前川はハンドルを切って交差点を右折させた。真っ先に現場に到着した交番勤務の巡査からの報告によれば、被害者は一命を取り留めており、犯行の目撃者らによって犯人は取り押さえられている、とのことであった。

須崎は応えない、気持ちを落ち着けるように煙草に火を点けた。

「しかし、驚きですよねえ。ホシはとてつもない怪力の持ち主で、剣の達人だなんて言われてるような奴ですよ。その取り押さえた目撃者ってのはプロレスラーか何かなんですかねえ」

前川の言葉に、須崎は煙を吐きながら「さあな」と応え、少しだけ窓を開いた。室内に漂っていた煙が空いた隙間から流れ出る。

今夜の須崎はどうも機嫌が悪いようだ、妙に反応が薄い。前川は話を止めて車の運転に集中した。

見慣れた澤田総合病院の正面玄関への坂道を登る、既にパトカーが車寄せに停車している。駐車場に車を停め、職員口を通って駆け足で現場の整形外科病棟へ向かう。

ナースセンターの前で野次馬を制していた制服姿の若い巡査が、前川達の姿を認めて駆け寄って来た。「ご苦労様です」と緊張した面持ちで敬礼する。まだ、高校生と言っても通用するほど幼さの残る顔である。

「ご苦労さん」と声を掛けながら非常線のロープをくぐる。白手袋をはめ、靴にはビニールのカバー、頭にもビニールを被って歩みを

進める。鑑識が入る前に、一本でも自分の毛髪を現場に残さない配慮である。
ナースセンターの前に立っていた中年の制服警官に須崎が声を掛けた。
「マルガイ（被害者）は？」
「無事です。幸いにも病院の中でしたので傷は深いですが命に別条はないとのことで」
「マルヒ（被疑者）は？」
「ナースセンターに」警官は軽く顎を振りながら応える。
「個室病棟の患者はどうなっている」須崎は間髪いれず、矢継ぎ早に問う。
「全て自分の病室の中で待機させています。我々が現着してからは誰ひとり部屋の外には出ていません」
須崎は「よし」と頷き、足を速めた。前川も後に従う。
何回か角を曲がって、現場の病棟に到着した。廊下の左手に個室が並び、右側の窓からは青白い月明かりが差し込んでいる。流れる雲がまだらに薄い影を投げかける。
廊下の真ん中から、前川達の足元近くにかけて赤黒い大きな血だまりが二か所できている。壁から天井にかけても、広範囲に血の飛沫が飛び散っている。
それらの血だまりのちょうど真ん中あたりに、青白い出刃包丁が落ちている。前川はゆっくりと歩みを進めた。「前川、血痕を踏むな」と須崎の声が聞こえる。
前川と須崎は包丁に近づき、ゆっくりとかがんだ。包丁の持ち手には血液がべっとりと付着し、黒く凝固し始めている。
「これが、凶器ですよねえ」前川は須崎を見た。
「日本刀じゃねえのが残念か？」須崎は普段の会話の感じで応える。
どちらからともなく立ち上がり、ナースセンターに向かう、やはり早足だ。さきほどの中年の警官が前川達を認めて近づいて来た。
「マルヒ（被疑者）と会う」須崎の一言に、警官はきびすを返して

ナースセンターに戻り、扉を引いて前川らを導き入れた。
須崎の後にナースセンターに入った前川は、周りを警官に囲まれ、俯いて座る被疑者の姿に目を疑った。前川の様子に須崎が気が付いた、顔を向ける。
「何だ、知り合いか？」
「澤田芳子――、院長の奥さんです」前川はごくりと唾を飲み込んだ。
「なに？」須崎は絶句した。
「刑事さん――」澤田芳子は顔を上げてゆっくりと立ち上がる。
昼間きれいにセットされていた髪は乱れ、でっぷりと全身についた脂肪を覆っている薄手の白いネグリジェは、赤剥けたように染まっている。動作に緩慢さは見られるものの、肉に埋まった細い目はしっかりと前川らに向けられている。
芳子を椅子に座らせようとする警官達を須崎は制した。「なんだ？」と応える。
「私がやりました。大変申し訳ありません」鼻から妙な呼吸音を立てて、深々と頭を下げる。前川は芳子の仕草に妙な空々しさのような違和感を感じた。
「それは、署のほうで詳しく話してもらうから――」
「いえ、前の二件も全て私なんです」頭を上げながら、須崎の応えに被せるように芳子は応える。
ナースセンターに緊張が走った。周りを囲む警官達が目を剥いて芳子に視線を送っている。前川と須崎も一瞬、継ぐ言葉を失った。ただ芳子を見ている。
ナースセンターの蛍光灯の下、芳子の眼の奥に得体の知れない光が蠢いたのを、前川は確かに感じた。

第三章　殺人鬼の幻　6

“病院の殺人鬼”逮捕のニュースは、早朝のテレビの速報テロップから始まった。途端、全てのチャンネルは報道特別番組を編成、第一の事件からの経緯をおどろおどろしく紹介しつつ、犯人に関して虚実ないまぜの報道を始めた。

捜査本部設置後、毎日署長室で行われている定例記者会見も、押し寄せたマスコミの数を考慮して、いつもより大きな会議室で、署長と県警捜査一課長が対応することとなった。

「田端さん、ご苦労様です。こちらです」風船のような身体を揺らしながら走ってきた田端幸作に、前川は署の取調室の方向へ手を差し伸べた。

「おう、ご苦労、ご苦労」田端は笑顔を見せながら前川の手前で立ち止まった。見かけによらず息は乱れていない。

前川と並んで取調室に向かう。聞くところによれば田端は県警ナンバーワンの取り調べの名人だという。人は“本当に”見かけによらない、と前川は感じていた。

廊下の左側に並んだ扉の一つを開けて、田端を通した後に取調室に入った。正面の窓から薄曇りの空が見える。

取調室の真ん中には、スチール製の机が置かれ、その両側に折り畳み式パイプ椅子が一つづ置かれている。入り口から向かって左側に澤田芳子が座り、入って来た前川達に真っ直ぐに視線を向けている。澤田邸で見たときの怯えた色は微塵も感じられない。

田端は芳子と視線を合わせたまま、ゆっくりと椅子を引き、腰を下ろした。前川も入り口脇に設置された聴取の記録係用の椅子に腰を下ろす。

まず田端は芳子の姓名や住所の確認など形通りの手続きを、普段の早口からは考えられないほど、一語一語言葉を区切りながら慎重に行った。漢字の確認などもしつこいほどに行い、応える芳子の表

情を覗っている。なるほど既に取り調べは始まっていると、前川は田端の様子を見ながら感じていた。
「さて――」ひととおりの手続きを終えて、田端は両手を机の上に重ねた。口元は柔らかく微笑んでいる。
「まず、貴方が全部やったそうだけれど、理由を聞かせてもらえますか」
田端は、丁寧な物腰で問うた。最近は被疑者の人権や取り調べの可視化など、警察の捜査を取り巻く環境は非常に厳しい、今回のようにマスコミからの注目が大きい事件にはより慎重な姿勢が求められるのだ。机を叩いて自供を迫る姿はもはやドラマの中でしかあり得ない。
「気に入らなかったからです」芳子は田端の視線を堂々と受け止めて応えた。
「ほう――」田端はわずかに目を引き絞った。暫しの沈黙。
「しかし、気に入らないからっていちいち殺していては貴方も大変でしょう。どういう所が気に入らなかったのですか」
「全てです」口元だけが動く。表情は能面のようだ。
「なるほど、じゃあ少し質問を変えましょう。貴方、被害者とはどんなところで面識があったのですか？」
「それは、あの看護師さんとは病院の中で何度もお会いしていますし――」
芳子の視線がわずかに泳いだ。田端はその変化を見逃さなかった。
「あの看護師さん、ですか。名前は分かりますか？」
田端の問いに、芳子は唇を引き絞った。何も応えない。田端は前川のほうにちらりと視線を遣ると、再び芳子に向き直った。
「それでは、他の二名の被害者の名前は？　知っていますよね？」
芳子はやはり応えない。前川は記録の手を止め、改めて芳子を見た。でっぷりと脂肪の付いた肥満体と言える体形、身長も年齢のわりに大柄だ、百六十センチ以上あるだろう、体重も百キロまではなくとも相当量ありそうだ。なるほどこのまま黒いフードを被れば、

外見上は防犯カメラに映ったホシの姿に近い。
　しかしながら、今回の件は別にして、前の二件は澤田芳子のような年齢の、しかも女性が実行し得るものなのだろうか。首を一刀のもとに跳ね飛ばし、胴体を広範囲にわたって複雑骨折がおきるほど“ものすごい力”で切断する。前川は視線を向けたまま、考えていた。
「おかしいですね。過去の被害者二名の名前はテレビでも頻繁に放送されています。犯人でなくても知っているはずなんですがねえ」
　じゅうぶんに間を取って田端は言葉を継いだ。
「澤田さん、全て包み隠さずしゃべってもらわないと困りますよ。貴方は被害者達の全てが気に入らない、と言った。と、言うことは被害者と当然、面識があるはずでしょう。名前も知らない人間をあんな殺し方ができるなんて、そいつはもう人間じゃあないですよ、いや私の経験上でも、そんな人間はこの世にはいない」
　田端は芳子に顔を寄せた。囁くように声を潜める。
「どうですか？　いったい何があったのですか？　教えてもらえませんか」
「孝に――」芳子が呟いた。肩が震えている。
「はい？　もっと大きな声で」田端が耳を寄せた。
「孝にちょっかいを出していたんです、あの女たち。孝は、孝をここまで育てるのに私がどれほどの思いをしてきたと思っているんですか、夫は仕事で全く家庭のことを省みてくれない、一人です、全て私ひとりで家庭をやりくりしてきたんです、そんな私の大切な、大切な孝を、あんなわけのわからない売女どもに渡してたまるか！！」
「渡してたまるか」の部分だけ芳子は歯を剥きながら絶叫した。
　犯行後、芳子が見せた初めての感情的な姿にも田端は柔らかな表情を崩すことなく、書類に目を落とした。
「孝さん、というのはご長男の？　今、大学の三年生でらっしゃいますね」

取り調べの最初に、聞き取り作成した調書を見ながら淡々と芳子に問うた。
「ええ、慶応の医学部に現役で入学しましてね」先ほどの感情の爆発が嘘のように、芳子は笑顔を浮かべている。
「その孝さんに、三人が皆、その――ちょっかいを出していたと。貴方はそれが許せなかった、ということですか」
「そうです」再び能面に戻った芳子は、唇だけで応えた。
「しかし、息子さんをそこまで思っているのならば、貴方が殺人を犯して逮捕されてしまっては、却って息子さんの将来に差し障るのではないですか」
「そういうことを考えたときもあります」
前川は二人の遣り取りを記録しながら、言いようのない違和感を感じていた。それは皮膚の深いところで起こっている痒みのように、掻いても掻いても届くことのないもどかしさに似ていた。
「澤田さん、私もねえ、こういうふうに色んな人間と話す機会が多いとですね、不思議と相手が何を考えているの分かる瞬間があるんですよ。それでねえ、澤田さん。今もね、そんな感覚が私に起こっているんですよ」
田端は砕けた口調になった。多少、攻め方を変えるつもりなのだろう。
「今日は長くなるな」前川は長期戦を覚悟した。

第三章　殺人鬼の幻　7

澤田総合病院の院長、澤田総一郎が青葉署にやって来たのは、午前九時過ぎであった。

澤田は地元の名士であり、政治家などにも顔が広い。到着の際には川上一樹青葉署長自らが玄関口まで迎え、聴取も署長室で行う、という特別待遇であった。

署長室の快適なソファに着席を促し、上野毛刑事課長と須崎係長も向かいのソファに腰を下ろした。聴取は上野毛が行い、記録係は須崎が行うことになっていた。

「まあ、気を楽にしてお話し下さい」上野毛より二十歳以上も若いキャリア署長である川上は、調子のずれた台詞を口にして、澤田の横のソファに腰を下ろした。

上野毛は皮肉を込めた一瞥を川上に投げてから、澤田に視線を向けた。

「先ほどまで、奥さまが別室で容疑者として事情聴取を受けておられました。容疑は殺人未遂です。整形外科病棟の看護師長である後藤珠代さんに出刃包丁で切りつけて重傷を負わせました。幸いにして命に別条はないとのことですが、重大な犯罪行為であることは明白であります」

「大変、ご迷惑をおかけいたしまして誠に申し訳ございません」澤田は深々と頭を下げた。

「後藤さんに対する殺人未遂容疑は、目撃者も存在し、ほぼ現行犯状態で取り押さえられております。従って動かしようのない事実であると考えております。ただ、我々が重大な関心を払っております点は、奥さまご自身が、病院内で起こった過去二件の殺人事件に関しても自供をしている、という事実なのです」

上野毛は淡々と、まるで下手な役者の台詞のように抑揚なく話した。

「芳子が、そんなことを――」澤田は絶句した。
「何か心当たりがおありになりますか」上野毛は僅かに笑みを見せる。
澤田は何かを考えている。片手で顎から頬を何度もさすり、俯き加減の瞳は一か所に留まることなく揺れている。
「我々がどうしても分からない事がもう一つあります」
澤田の反応を試すように上野毛が続けた。澤田が顔を上げる。
「奥さまは犯行の動機として、息子の孝さんの名前を挙げておられます。孝さんというのは――？」
上野毛は言葉を区切り、澤田を覗きこむように顔を寄せた。
「孝の名前を挙げているというとは、どういう意味なのでしょう？」
澤田は質問で返した。
「何でも、今回の後藤さんを含めた三名の女性が息子さんに、その、興味を持っていたといいますか、まあ可愛い息子さんをよその女に持って行かれることを防ぎたかった――と」
「そんな――そんな理由で芳子は」澤田は泣き笑いのような表情で顔を左右に振った。
「澤田さん――」上野毛は澤田の表情を一つも見逃すまいと、じっと視線を当てながら言葉を継いだ。
「奥さまはそのように仰っていますが、どうも動機としては薄い。取り調べを担当した刑事は、奥さまが息子さんを庇おうとしているのではないか、と報告してきました」
広げた脚に両肘を付けて、さらに顔を寄せる。
「つまり――息子さんが“病院の殺人鬼”なのではないか、と」
「君！　上野毛課長、口を慎みたまえ、無礼だぞ！」
ソファに埋まって遣り取りを聞いていた川上が、慌てて上半身を起こした。
「上野毛さん――」澤田は隣に座る川上を目で制した。
「既にお分かりのことと思いますが、澤田家に孝という長男はおりません」

須崎が記録を取る手を止めて顔を上げた。川上があからさまに驚きの表情を見せる。上野毛だけが澤田の発言に表情を変えることなく、視線を向けている。
澤田は眉根を寄せる一方で、口元には自嘲的な笑みをたたえて言葉を継いだ。
「実は、長男の孝は今から十一年前、ちょうど大学三年生のときですが、交通事故でこの世を去りました。初産が死産だった芳子は、二番目の子供である孝を溺愛しておりましたので、孝を失った悲しみのあまり心に病を抱えてしまいました。つまり、孝が死んだことを受け入れられず、まだ生きているものとして振舞い始めたのです」
澤田は頭を抱えて俯いた。肩が震えている。
「私も病院経営の忙しさにかまけて、きちんと芳子に向き合うことをしませんでした。芳子の気が済むならと、私も孝が生きているかのように振舞いました。しかし、芳子の症状は目に見えて悪化して――、ついには芳子の中に本当に孝が現われるようになってしまったのです」
「孝さんが現われる、とは？」上野毛は柔らかく問うた。
澤田は顔を上げて、背筋を伸ばした。顔からは表情が消えている。
「芳子の中に孝という独立した別の人格が生まれてしまったのです。解離性同一性障害、一般的には二重人格などと呼ばれています」
川上も須崎も言葉を失っている。上野毛だけが全てを知っていたかのように、冷静に澤田を見ている。
「なるほど。奥さまは存在しない息子さんを庇っているのではないか、と」
「そう思います」澤田も無表情で上野毛の視線を受け止めている。
「息子さんは、剣道で県大会上位入賞の経験がおありだとか」
「え、ええ。確か孝が高校生のときだったと」澤田はわずかに怪訝な表情を見せた。
「そのことは奥さまも御存じですね」
「ええ勿論、会場に二人で応援に行ったのを憶えています」

「そこで先生にお聞きしたいのです。人格が変わったときには元の人格に記憶は残らないものなのか、そして人格のみならず体力も大きく変わってしまうものなのか。つまり中年の女性が、人格が入れ替わっただけで男性並みの腕力を振るったり、竹刀など持ったこともない人が、剣の達人のように変わることが可能なのか」

「上野毛君、君はいったい何を言っているんだ」川上が馬鹿馬鹿しいとばかりに引きつった笑顔を見せた。上野毛は表情を変えない、真剣に澤田を見ている。

澤田は表情を緩めた。口元には薄笑いを浮かべている。

「上野毛さん、おっしゃりたいことはわかりますが――、まあ、いいでしょうお応えしましょう、まず――」澤田は人差し指を立てた。

「一般的には別人格の記憶は残らないと言われています。しかしながら芳子の場合は、驚くべきことに別人格の孝と会話をしています。これは従来の症例からは考えられないことです。会話ができるということは別人格である孝の言葉を記憶しているということですからね」

澤田は夫としての悲痛な表情から、いつの間にか医師の顔へと変化している。

「そういう意味では、芳子の場合は記憶に残っている可能性は高い、と言えます。又、体力や技能に元の人格にはない面が現われるのか、という点ですが、確かに世界中の報告を見ると、知るはずのない外国語を話したり、男性並みの力を振るったとの報告がありますが、これに関して私は多分に懐疑的です。まあ何とも言えない、と言うべきなのでしょうか」

「なるほど、有難うございます」

上野毛は満足げに頷いた。

第三章　殺人鬼の幻　8

「もう、いいのではないですか」署長の川上が上野毛と澤田に交互に目を遣りながら、腰を浮かせようとしている。
「署長、申し訳ありません、実は本当にお聞きしたい点はこれからでして」
言葉で詫びながらも、上野毛は鋭く川上を見据えた。川上の態度には、澤田のような実力者と揉めたくない、という態度があからさまであった。
「何でしょうか、私がお応えできることならば」
澤田は顔を寄せた。最初の頃よりも捜査に協力的な姿勢を見せている。
「ありがとうございます。それでは遠慮なく質問させていただきますが、全室に張り巡らされたカメラと、病院の中を巡る抜け穴のような通路は何のために使用されているのでしょう」
「それは――」澤田の表情から一転して顔色が消えた。背もたれに身体を預け、ソファに埋まる。
澤田の横で、川上が「何のことだ」とばかりに目を白黒させている。
「署長、申し訳ありません。実はこの構造の件は、本来ならば今朝にでも署長にご報告がいく予定であったのですが、昨夜に事件が発生したせいで、このような形でお耳に入れることになってしまいまして――」
上野毛は川上への報告がなされていなかったことを詫びた。キャリアは重大な報告事項が自らの頭を飛び越えてなされることを何よりも嫌う。上野毛は長年の刑事生活で身にしみて分かっていた。
「いかがでしょう、教えていただけませんか」上野毛は澤田に向き直り、再度問うた。
「それは、今回の捜査に関係のあることなのでしょうか？」澤田は

表情から一切の感情を取り去った顔で問い返す。
「昨日の件は別として、過去二件の事件における犯人の逃走経路が問題となっております。当初、我々は外部に逃走したと考えていたのですが、抜け穴が存在するということであれば根本的に考え直さなければなりません」
澤田は上野毛に向けた視線を引き絞って「ほう――」と呟くと、ゆっくりと視線を外し、川上に顔を向けた。
「署長、私の病院に“抜け穴がある”なぞと言われて笑っていられるほど、残念ながら私は人格者ではありません。確かに妻の件ではご迷惑をおかけしておりますので、私もできるだけ協力を、と考えておりましたが――。この件は弁護士と相談させていただき、対応を検討させていただきます。宜しいですな」
「それは、もう！　度重なるご無礼をご容赦ください」川上は深々と頭を下げた。
澤田は視線を上野毛に戻した。
「私はこれで失礼いたしますぞ」
上野毛は黙って、憮然と立ち上がる澤田に頷いてみせた。視線は外さない。
背中を向けて署長室を出て行く澤田の後に川上が従い、立ち上がろうとする上野毛らを追い払うように手を振った。署長室の扉を後ろ手に閉めながら上野毛に怒気を含んだ視線を投げる。
「どうしますか」扉が閉まると同時に、須崎が記録簿から顔を上げた。
「抜け穴があることは間違いがない。それを否定してかかるってことは、知られちゃまずい何かがある、ってことだ」緊張を解いた上野毛はソファに背を預ける。
「しかし澤田は実力者ですからねえ、弁護士も高い報酬の奴を連れて来るでしょうな」
「ああ――」と相槌を打ちかけたところで、上野毛の携帯電話が鳴った。通話ボタンを押して耳に当てる。

電話は中野指導官からであった。
「上野毛さん、証物（証拠物件）だ。澤田の自宅からホシが着用していたと思われる黒のパーカーが出た、こりゃあ芳子に決まりだなあ」
中野は興奮気味に声を上げている。溜まっていたストレスが一気に爆発しているようだ。
「そうですか、パーカーが。今、澤田芳子はどうしているのですか」
「相変わらず、冷静な奴だなあ。“名人田端”が、これからお相手だ」
「私も見せていただいて宜しいですか？」
「おお、見とけ見とけ。第一の方でもうすぐ始まる、それじゃあ」
一方的に電話が切れた。
上野毛は中野が電話してきた目的がよくわからなかった。恐らく物証が出たことが嬉しくて、誰かに話したくてしょうがなかったのであろう、と理解した。
「証物が出た。澤田の自宅からだ」上野毛はソファから立ち上がった。
「私は取り調べの様子を見てくる。芳子の二重人格の件を事前に伝えておきたい。須崎は？　どうする？」
「私も見せてもらいますわ」須崎も頷きながら立ち上がる。

第三章　殺人鬼の幻　9

「奥さん、何度も悪いね」風船のようにふくらんだ醜い顔を捻って、田端と名乗った刑事は私に笑顔のようなものを見せた。ああ気持ちが悪い。

田端の様子が一回目の面談のときと微妙に変わっているように感じた。何か裏側にある事実を隠して私を試しているような、小馬鹿にしたような感じ。私は不快であった。

私は、言われるままにパイプ椅子に腰かけた。正面に座った田端の肩越しに壁一面を覆う大きな鏡が見える。なるほどマジックミラーで私の様子を見ている者がいるのだろう。

「実は奥さんの自宅から、犯行の際に犯人が着用していたと思われる衣服が見つかってね。その件に関してまた色々と聞かせてもらいたいのですよ」

私は田端の言葉に動揺した。何ということだ、孝は証拠を処分していなかったのだ。いや、これは私の失敗だ、私が先回りして処分しておくべきだった。私は動揺を気取られないように俯いて表情を隠した。

「まあ、物的証拠が出てきたからねえ、奥さんの言うように二件の殺人事件も貴方の犯行の可能性が俄然、高まったわけなんだけれど――」

突然、田端が言葉を止めた。私は俯いた額の辺りに視線を感じ、そっと顔を上げた。切り込みを入れたような細い眼が私の眼の前に近づいてくる。

「私はねえ、どうしても二件のヤマが貴方の犯行だとは思えないんですよ」

蛞蝓（なめくじ）のような色の悪い唇が動いた。私の背中に小さい虫が這いまわるような悪寒が走る。

「詳しくは言えないけれどねぇ、二件のヤマは貴方みたいな女性の

力では実行不可能なんですよ。それくらいね、特殊な犯行方法なの」
私の心臓が高鳴っていく、田端に聞こえてしまうのではないかと言うほど大きな音を立てる。そうだ、私は孝がどうやって二人を手に掛けたのか全く分かっていない、ただ孝を守らなければと――、私が実際に犯行を犯して、後の二件も私がやりました、と自供すれば私の罪になるだろう、と――、私は自分の浅はかさを呪った。
私は、ただ黙って田端を見つめるしかなかった。田端も私に視線を当てている。
「これはねえ奥さん、男だよ、男の犯行。奥さんのところで男って言えば旦那さんの総一郎さんと、あと、誰がいたっけ？」
私は田端の言葉を聞いて確信した。警察は一連の犯行が孝によるものであることを把握している、孝の居所を私から聞き出すつもりなのだ！　私は口をつぐんだ。
母さん、もういいよ。僕が直接話そう、どうやらそのほうが良さそうだ。
「――孝だよ、澤田孝。澤田総合病院の跡取り息子だよ」
田端は目を剥いて私の顔を見詰めた。
「刑事さん、いろいろ言ってるけど、要は僕が犯人だって言いたいんでしょ。もう耐えられないんだよ、母があんたに厭味たらたら言われるのを見てるのは」
「君は誰だ？　孝君か？」
膨らんだ顔に脂汗を浮かせて、田端が声を絞り出す。視線は凍りついたように私に当てたままだ。
「ああ、ちっとも招待してくれないから僕のほうから来てやった」
孝は人懐っこい丸顔に笑顔を浮かべている。私によく似ていると言われる笑顔だ。
「何故、我々が君を招待しなければいけないのだい？」田端は唇の端をねじった。どうやら笑顔を作っているつもりらしい。
「そんなこと決まってるじゃないか、だって俺が――」いけない、私は咄嗟に孝の言葉に被せた

「――だって母親が、殺人容疑で逮捕されれば、そりゃあ、もう、ねえ田端さん」
私は自分が何を言っているのか分からなくなってしまった。孝が話す言葉を遮ることができれば何でもよかった。
「奥さん、悪いんだが、その、孝さんと話をしたいんだけれど」
田端は何故か、さらに目を剥いて私を見ている。もう、みっともないほどに脂汗を体中に浮かべて。
「母さん、もういいよ。日本の警察は世界一だ、もう分かっているさ」
孝は軽く、溜息のような息を吐いて呟いた。
「何を言っているの、孝！　何がもういいのよ！　貴方にはこれから先があるのに、こんなところにいてはいけない！」
私が突然、声を荒げたことに驚いたのだろう、田端は肩をびくんと震わせた。
「だけど母さん、罪は償わないと」孝は泣き笑いのような顔を見せ、田端に視線を向けた。
「刑事さん、僕がやったんです。母は僕の罪を被ろうとしているだけです、僕が“病院の殺人鬼”なんです」孝は淡々と告白した。
（ああ駄目だ、駄目だ、孝、あなたは何を言っているの？　孝、孝――！）
私は声にならない叫びを上げた。身体に力が入らない、私はパイプ椅子に崩れ落ちた。
田端はいつの間にか、立ち上がって私を見下ろしている。
「今の、あんたは誰だ。奥さんか？　孝君か？」
田端は訳のわからないことを口走っている。

第三章　殺人鬼の幻　１０

澤田芳子の取り調べの様子を見終え、廊下を歩いていた上野毛は背後から声を掛けられて振り向いた。
「ちょっといいか」
声の主は捜査本部の中野指導官であった。剃刀で切ったような細い目の脇に皺を刻んで笑顔を見せている。上野毛は向きを変え、中野の後ろに従った。
中野と上野毛は、全員、出払ってがらんとした捜査本部の机を挟んで、パイプ椅子に腰かけた。
「悪いな上野毛、ちょっとお前の考えを聞かせて欲しくてな」
「なに、構わんが――。珍しいな、お前が他人に相談なんて」
中野と上野毛は警察学校の同期である。元々上昇志向の強かった中野は昇進試験を受け続けて本部の指導官の立場にまで上り詰めたが、現場志向の強い上野毛は課長とはいえ、所轄であり、未だ警部補であった。両名の立場には警察機構内においては歴然とした格差が生じていた。
「捜査本部の中でも、お前くらいしか正直に考えを聞ける奴がいねえからな」
「お偉くなると、いろいろ足を引っ張る奴も出て来るってことか」
「まあ、そういうことだ」
中野は上野毛の刑事としての能力に一目置いていた、いや正直なところ、自分よりも上だとすら考えている節もあった。
「芳子のことか？」上野毛は問うた。
「証物が出て喜んじまった自分が恥ずかしいよ。どうやら現実はこの上なく複雑だ」
「俺はよく分からないのだが、芳子が二重人格者であって孝が実行犯である場合、芳子をホシとして問うことができるのか？」
「その点は、過去の判例を見ても問題がない。医師の鑑定が必要に

なってくるが恐らく芳子の立件は可能だ。だが上野毛よ、お前本当に芳子がホシだと考えているのか？」
アルミの灰皿を手間に引きよせ、中野は煙草に火を点けた。
上野毛は顔をゆっくりと左右に振りながら、口辺に薄い笑顔を浮かべる。中野は上野毛の表情に頷くと、言葉を継いだ。
「俺もだ。首を一刀の元に刎ねる、胴体を複雑骨折が起きるほどものすごい力で切断する、こりゃあ、いくら二重人格者とは言え、女の筋肉量でできる芸当じゃねえ、いや男にしたって人間離れした怪力の持ち主じゃねえと無理な話だ」
「だが、証物は澤田の家から出てきた。芳子の別人格である孝の自供を裏付けている」
上野毛は中野の思考を辿るように応える。
「上野毛よ、お前の考えを聞かせろ」中野は煙を上向いてひと吐きすると、太い二の腕を机の上に乗せて身を乗り出した。
「言うのは構わんが、ひとつ条件を出させてくれんか」上野毛は口元に笑みを浮かべたが、目は真剣に中野を見ている。
「何だ、駆け引きかよ。よかろう、言ってみな」中野は、にやりと歯を見せた。
「以降、澤田病院関係者は我々、所轄に任せてほしい」
顔を寄せて迫る上野毛に、中野は頷いた。
「よかろう、ただし澤田総一郎と芳子夫妻は本部に任せてもらう。それでいいな」
「構わん、しかし芳子は当然として、旦那のほうも渡さないところを見ると、俺とお前の間の考えに、差はないと思うぜ」上野毛は中野の承諾を得たことで、青葉署の部下たちとの約束を果たした。これで大手を振って病院内を調査できる。
「さて上野毛、お前の考えは？　聞かせてくれ」
「俺も、今回の件は別として、前の二件に芳子は無関係だと思っている。勿論、孝もだ。理由もお前と同様、いくら別人格とは言え、所詮は女の筋肉量だ、実行可能なレベルを超えている」

中野は煙草をくわえたまま、腕を組んで聞いている。剃刀で切ったような細い目はさらに引き絞られている。
「しかし、芳子の別人格である孝は自分が犯人だと言っている。何故だ？　芳子が犯人では在りえないとするなら、元人格の芳子でなく別人格の孝だけを“自分が犯人だ”と思わせるようにし向けた者がいる、ということだ。そんなことが可能なのか？　可能であれば誰が？　俺は旦那の総一郎しかあり得ないと思っている、間違いなく澤田総一郎は何かを行い、何かを隠している」
上野毛は一気に語って息を継いだ。
「お前は、総一郎が何を隠していると思う？」煙草をくわえたまま中野が問うた。
「わからん、だが俺は澤田病院にその鍵があると考えている。勿論、その本丸は総一郎だが、そっちのほうはお前達、本部が手放してくれないからな。俺たち所轄は遠回りでも地道にやるさ」上野毛はわざと抜け穴のことを話さなかった。
「まもなく最初のヤマのＤＮＡ鑑定が上がってくる。芳子がホンボシかどうかは、そこで分かるはずだ」
中野は大きく煙を吐き出すと、灰皿にこすりつけながら「そしたら、又、お前の意見を聞かせてもらいたいもんだな」と歯を見せた。
上野毛は、抜け穴の件は長くは伏せておけそうにないな、と中野の笑顔を見ながら考えていた。

最終章　無縁人間　1

青葉署の黒田康司が澤田病院の玄関口に姿を現したのは、午前十時を過ぎたところであった。マスコミと患者の人波の中を、頭一つ分飛び出した黒い影が進む。

黒田は受付の前を通り、階段を昇り、早足で進んでいる。すれ違う人は黒田の発する只ならぬ雰囲気に次々と道を譲っていく。

ナースセンターの前を右に曲がって、さらに進み、整形外科病棟の個室棟の廊下で立ち止まった。雨音が廊下に響いている。つい七、八時間前に殺人未遂事件が発生した現場とは思えない静けさだ。

黒田はしばらくの間、背中を向けて廊下に立っていた。正面には、特別室への薄暗い廊下が続いている。

やにわに振り向き、廊下に設置された防犯カメラに目を向けた。誰に対してなのか、何の意味があるのか、カメラに笑いかける。

再び歩みを進める。最後の角を曲がってすぐのところに特別室の扉がある。黒田はポケットから鍵を取り出して鍵穴に差しこんだ。シリンダーの外れる音がして鍵が開く。

建てつけが悪いのだろう、子猫が鳴くような音を立てて扉が開いた。黒田は特別室の中に入ると、真っ直ぐ正面に進み、カーテンを開く。部屋の中に薄明かりが差しこんできた。

やがて黒田は奇妙な行動を始めた。壁にかかった額縁をずらして裏側を確認し、ベットやソファの位置をずらす、壁を叩いたり、耳を当てている。何かを探しているようだ。

黒田は再び入り口のところまで戻ると、目だけを動かして部屋の中をゆっくりと眺め回した。

「おい、ボタンがあるはずだろう」

突然、黒田が言葉を発した。視線はいつの間にか、正面に向けて留まっているが、先には誰もいない。ただ窓が鈍色（にびいろ）の空を切り取っているだけだ。

「自由に出たり入ったりできるってことは、この部屋の何処かに入り口を開けるボタンがあるんだろう？」
黒田はいったい何を言っているのか、そして黒田はゆっくりと斜め上に顔を上げた。そう、院長の澤田を始めごく一部の人間しか存在を知らないはずのカメラに目をむけて――
「なあ、いまからそちらへ行きたいんだよ。入り口を開けてくれねえか」
と“わたし”に語りかけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4885k/

無縁人間

2010年10月9日11時48分発行